



福部村埋蔵文化財調査報告書第9集

IWAMI FUKUBESON
鳥取県岩美郡福部村

YADANI
箭溪18・19号墳発掘調査報告書

1993. 3

福部村教育委員会

序 文

福部村には、古くから多くの埋蔵文化財の存在が明らかとなっており、近年の発掘調査では、縄文時代前期から古墳時代に至る多くの貴重な資料が報告されています。

特に鳥取県下でも数少ない縄文時代の遺跡が3ヶ所も周知の遺跡として確認されており、貴重な文化遺産として後世まで保護すべく使命を痛感しています。

本村では、昭和62年から平成元年までの3次に渡る栗谷遺跡の発掘調査で全国でも類例の少ない貴重な資料が多く発見され、この重要な遺跡の認識を契機に文化財に対する住民の意識が高揚し、村内に分布する多くの文化財をどう保護していくべきか検討する良い機会でもあったと思います。

今回行なった箭溪古墳群の発掘調査では、林道建設工事が前提となっていますが、現状保存最優先を念頭に置き路線計画時から綿密な調整を重ねてまいりましたが、多くの制約によりやむなく記録保存による発掘調査となりました。

しかし、その成果として私たちの先住民の生活に密着した多くの文化財資料を得ることができました。

最後に、今回の発掘調査を実施するにあたり、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位の多大なるご指導、ご協力に対し深甚なる感謝を捧げるとともに、発掘調査に従事していただいた方々に対し、厚くお礼を申しあげ発刊のご挨拶といたします。

平成5年3月

福部村教育委員会

教育長 老 門 辰 生

例 言

- 1 本書は、地区林業構造改善事業（林道箭溪線開設工事）計画に伴い、福部村の依頼により福部村教育委員会が調査主体者となり、平成3年度に実施した箭溪18・19号墳発掘調査報告書である。
- 2 本古墳は、鳥取県岩美郡^{ふくべそん}福部村^{やだに}大字^{くら}箭溪字蔵282・284-1に所在する方墳2基である。
- 3 本書に掲載の地形図の内挿図2は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、挿図3は、同5千分の1地形図の複製を使用した。
- 4 本書に使用した挿図の座標・方位は磁北であり、標高は、東京湾平均潮位を基準としている。
- 5 本書に使用した遺構及び遺物は次の略記号で示した。〔P：ピット遺構、P₀：土器〕
- 6 本書は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力のもとに谷岡陽一が執筆編集した。
- 7 箭溪18号古墳第1号・2号埋蔵施設の石材については、鳥取大学教育学部教授赤木三郎氏に鑑定していただいた。記して深く感謝いたします。
- 8 出土遺物・図面・写真等の整理は、鳥取県埋蔵文化財センター指導のもとに谷岡が行った。
- 9 出土遺物、実測図等は、福部村教育委員会で保管している。
- 10 出土遺物には、〔例：YD・18・No.〇〇（箭溪古墳・古墳番号・取上げ番号）〕をネーミングしている。
- 11 発掘調査に際し、現地調査及び報告書の作成あり福部村役場産業課・地元箭溪区長・潮崎 誠氏（豊岡市教育委員会）・中村暢夫氏（鹿島町歴史民俗資料館）にご指導ご援助をいただいた。銘記して感謝申し上げます。



調査風景

目 次

序 文
例 言

目 次・挿 図 目 次・図 版 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
(箭溪古墳群分布図対象表)	9
第Ⅲ章 箭溪古墳群	10
第Ⅳ章 発掘調査の概要	10
第1節 箭溪18号墳	15
第2節 箭溪19号墳	25
第Ⅴ章 発掘調査の成果とまとめ	29
図 版 編	

挿 図 目 次

挿図1 福部村位置図	3
挿図2 村内遺跡分布図	6
挿図3 箭溪古墳群東丘陵分布図	7・8
挿図4 箭溪18・19号墳地形実測図	11・12
挿図5 箭溪18・19号墳墳丘遺存図	13・14
挿図6 箭溪18号墳墳丘土層断面図	17
挿図7 箭溪18号墳第1号埋葬施設実測図	19・20
挿図8 箭溪18号墳第2号埋葬施設実測図	21
挿図9 箭溪18号墳第3号埋葬施設実測図	22
挿図10 箭溪18号墳ピット遺構図	23
挿図11 箭溪18号墳出土遺物実測図	24
挿図12 箭溪19号墳墳丘土層断面図	26

挿図13	箭溪19号墳出土遺物実測図	27
挿図14	箭溪19号墳埋葬施設実測図	28

図 版 目 次

図版 1	1. 箭溪18・19号墳遠景（西から） 2. 箭溪18・19号墳眼下に広がる福部平野
図版 2	1. 調査前の箭溪18・19号墳（北東から） 2. 調査後の箭溪18・19号墳（北東から）
図版 3	1. 調査前の箭溪18・19号墳墳丘（南東から） 2. 表土除去後の箭溪18・19号墳墳丘（南東から）
図版 4	1. 18・19号墳埋葬主体部検出状況（南東から） 2. 調査後の18・19号墳墳丘（南東から）
図版 5	1. 18号墳南東辺（19号墳北西辺）周溝断面（北東から） 2. 19号墳南東辺周溝断面（南西から） 3. 17号墳南東辺周溝断面（南西から）
図版 6	1. 18号墳第1号埋葬施設（南西から） 2. 18号墳第1号埋葬施設（南東から） 3. 18号墳第2号埋葬施設（北東から） 4. 18号墳第2号埋葬施設（南東から）
図版 7	1. 18号墳第3号埋葬施設完掘状況（南西から） 2. 18号墳第3号埋葬施設完掘状況（北西から） 3. 18号墳ピット遺構（P3）土層断面 4. 18号墳周溝内弥生土器（P01）検出状況
図版 8	1. 19号墳埋葬施設木棺痕跡土層断面（南から） 2. 19号墳埋葬施設完掘状況（西から） 3. 19号墳埋葬施設完掘状況（南から） 4. 19号墳北東辺不明の凹壁断面（墳頂部から）
図版 9	1～3・5・6. 18号墳出土遺物 4. 19号墳出土遺物

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査の経緯

福部村では、平成元年度より地区林業構造改善事業（林道箭溪線開設工事）を計画した。同計画では、一般県道福部停車場線から山裾を南北に掠めるように延びる J R 山陰本線沿線にほぼ並行し、南山腹へ向かう工事延長約 1,400m、幅員 4 m の突込み線形の林道で、年約 200m を開設する年次継続事業である。

本事業実施に伴い、平成元年度に福部村産業課より埋蔵文化財の有無について事前協議がなされ、I 期工事区域には周知の箭溪 7・8・9 号墳の存在が明らかとなっていた為、文化財保護を優先して J R 沿線側（西）に大きく迂回し工事が施工された。

翌年 8 月 24 日に II 期工事以降の計画路線について事前協議があった。この付近一帯は、昭和 50 年に遺跡分布調査によって 11 基の古墳が周知の遺跡として確認されていた為、林道開設計画路線を中心に再度分布調査を行う事となった。

分布調査は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力のもとに 8 月 30 日・同 31 日・9 月 11 日・同 12 日の 4 日間に渡り、地元箭溪地区民から通称「蔵^{くら}の山」と呼ばれている丘陵と溪谷の踏査を綿密に行った。

踏査の結果、II 期工事計画範囲となる丘陵先端部の J R 用地内で、明治 40 年から施工された鉄道建設による切壁部に半壊状態となった方墳と思われる墳丘が確認され、次いで約 15 m の方墳 2 基、更にこの丘陵尾根上を山頂に向け約 12m～18m 程度の円墳と階段状を呈する墳丘 17 基が隙間なく連なり、この古墳が立地する尾根の最高所には前方部を北東に向けた東因幡海岸沿で最大規模となる全長 46m の前方後円墳（箭溪 29 号墳）が新に確認された。

続いて行った III 期工事以降の計画範囲となる南隣丘陵の踏査では、やはり丘陵の尾根に沿って連続或いは点在の形で約 30m の前方後円墳 2 基と約 10m～18m 程度の円墳 20 基が確認され、今回の分布調査で合計 43 基の古墳が新に確認された。

今回分布調査によって確認された 43 基と周知の箭溪古墳として位置付けられていた 17 基を加えると箭溪古墳群は 60 基となり、福部村内で最も分布密度の濃い地域として古墳時代の古環境或いは集落形成を検討する場合無視する事のできない地域となった。

この分布調査結果をもとに、村産業課担当職員と村教育委員会文化財担当職員で現地確認の後、事業計画地内における古墳の現状保存について路線変更等種々に渡り協議検討を重ねたが、II 期工事計画範囲については、J R 用地内の丘陵尾根の末端部に立地する 17 号墳から標高約 77m の 29 号墳まで 17 基の古墳が隙間なく連なり、林道建設の工法・目的財政等の観点から現状保存は不可能と判断せざるをえなかった。

その結果、福部村教育委員会が調査主体となり、箭溪18・19号墳は原因者負担による発掘調査を実施し、Ⅲ期工事以降の計画範囲については、確認されている古墳を避けて迂回する道路線形を設定することとなった。

第2節 調査の経過

林道建設工事は、発掘調査の調査規模・調査時期・調査期間・調査体制の確立等を勘案し、平成2年度に予定していたⅡ期工事計画範囲の工事は見送られた。

しかし、原因者となる村産業課では、見送りとなった林道開設工事が急務であり、平成2年度に福部村教育委員会と協議の上、同教育委員会の意向に添って立ち木の伐採と現地形の地形測量を業者委託により実施した。

現地での発掘作業は、平成3年4月1日から4ヵ月の予定で着手したが、比較的温暖な天候に恵まれ当初の予定していた調査日程以上の進捗状況を見せ、6月6日で現地調査を完了し、翌年3月20日で室内整理作業を完了した。

発掘調査面積は1,300㎡、現場での実労日数は、43日間を要した。

発掘調査の組織

調査団長	老門 辰生（福部村教育委員会教育長）
調査委員	浜本 勝美（福部村文化財保護委員長）
	河本 康二（福部村文化財保護委員）
	黒田 一郎（ ” ” ）
	黒田 茂次（ ” ” ）
	田村 義朗（ ” ” ）
	横山 利（ ” ” ）
調査指導	長岡 充展（鳥取県埋蔵文化財センター）
	山柘 雅美（ ” ” ）
	中原 斉（ ” ” ）
調査員	谷岡 陽一（福部村教育委員会社会教育主事）
作業員	猪上 一義 井上 崇 宇山 光徳 奥田 悟司
	河本 秀樹 岸 守 黒阪よ志子 坪内恵美子
	坪内 由枝 原田 崇 村上登喜枝 山方 進
	山根百合子 山本つたえ

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

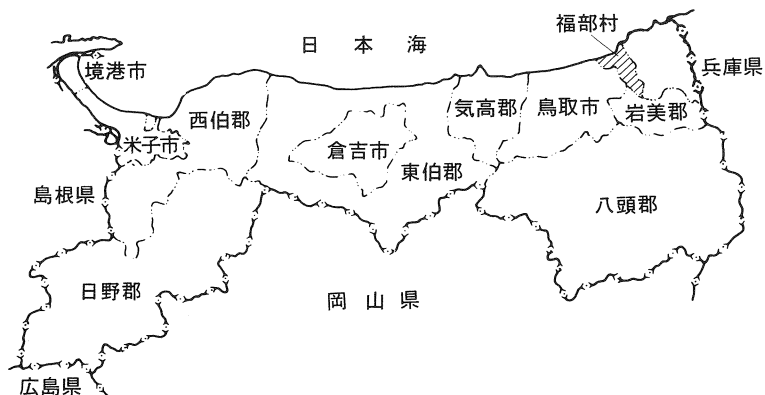
福部村は、鳥取県東部の海岸沿いに発達した山陰海岸国立公園鳥取砂丘の後背地に位置し、東西南の三方を扇ノ山山係に囲まれている。この緩やかな起伏をもつ砂丘の内側には、ラグーンの名残りで江戸時代から干拓がなされ「湯山田圃」・「細川田圃」と呼ばれていた湿田が広がり、本流の塩見川と支流の箭溪川・江川に沿って細長く形成された沖積平野となっている。気候的には、日本海の対馬暖流によって比較的温暖で過ごしやすいが、冬季には平野部で50cm～60cm程度の積雪を見ることがある。

箭溪古墳群は、福部平野を眼下に一望し、北の鳥取砂丘更に日本海の白波まで見通すことのできる景勝地で、隣接する鳥取市・岩美町・国府町との境を分ける「上野山」（標高390m）を主峰とする塩見川沿に開けた平野と支流の箭溪川沿いに開けた平野の合流点の急傾斜の山裾に位置する。

当地は、地元箭溪集落の人々から通称「蔵^{くら}の山」と呼ばれている標高約220mの山頂から西方へ幾重にも狭長の丘陵が連り、この丘陵と渓谷の山裾を南北に掠めるようにJR山陰本線沿線が京都から鳥取方面へ延び、更に平野の中央をこの鉄道に並行して箭溪川と県道福部鳥取停車場線が延びている。

北へ約250mの山裾には、近年の発掘調査で縄文時代後期を主体とする37基の貯蔵穴群と多種多様の膨大な遺物が検出されて注目を集めた「栗谷遺跡^{くりたに}」が広がり、舌状に突出した栗谷遺跡の西丘陵裾に沿って北へ約500m進むと、小溪谷の山麓に鳥取県指定の天然記念物「坂谷神社社叢」がある。この社叢は、高木層にスダジイの巨木をはじめヤマツバキ・カゴノキ、亜高木層にモチノキ・サカキ・シロダモ、低木層にゴンズイ・ヌルデ・コシウノキ、草本類にホンダ・オニヤブソテツ・イワタケソウ・クリハラなど南限・北限として知られる多種類の植物が混生する県内でも例の少ない照葉樹林帯となっている。

この福部平野において、人の生活が営まれ



挿図1. 福部村位置図

始めたと推定される縄文時代前期は、いわゆる縄文海進によってそのほとんどが日本海に没する入海若しくは宍道湖のように海水と淡水が入り混じる汽水湖と推定され、人々はこの入り江を見下ろす丘陵付近を拠点として、海の幸・山の幸を採取する生活を送っていたと考えられる。又、栗谷遺跡の北西約3kmの対岸に面する入江には、縄文時代中期を主体とし、古墳時代の住居跡も検出されるなど長期に渡る生活の痕跡がたどれる「直浪遺跡」の存在が確認されている。直浪遺跡は過去の試掘調査から、生活面は砂丘の下に埋没していると考えられており、この遺跡も標高7～8m程度の緩傾斜丘陵を中心に広がり、前面に入海が広がる場所に立地していたと考えられている。

このように栗谷遺跡・直浪遺跡で縄文時代・弥生時代・古墳時代と長期に渡り同じ場所で生活が営まれていることから、この地が食糧など自然の恵が豊富で、環境的にも永住しやすい地であったことが窺われる。

第2節 歴史的環境

福部村内では、旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、因幡地方に分布する縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が出土している鹿野町の柄杓目遺跡に次いで、栗谷遺跡(2)が前期まで遡る古い遺跡である。福部村内には、この「栗谷遺跡」を始めとして前項に記述した「直浪遺跡」(1)が縄文時代の代表的な遺跡として知られている。近隣では、福部砂丘に境を接する鳥取市の浜坂砂丘に「浜坂追後遺跡」・「長者ヶ庭遺跡」・「朽木山遺跡」が縄文時代の遺物散布地として知られている。この他湖山池湖岸の「布勢遺跡」では、昭和55年の発掘調査で縄文時代後期を主体とする土器・石器・木器などが多量に検出されており、現在までに因幡地方で発見されている縄文時代の主な遺跡は海岸部に比較的多く集中分布している。

弥生時代になると稲作が普及し、各石器の他に金属器の使用が始まり、隣接する岩美町新井では流水文銅鐸が出土し、浜坂砂丘や湖山砂丘では、銅鎌・鉄鎌が発見されている。

縄文時代に人の住みついた栗谷遺跡・直浪遺跡にも弥生時代の人々は、継続して生活しており土器・石器などが多く検出されている。この箭溪古墳群の東を流れる塩見川の源流には、上野山台地(標高250m)に開拓地が広がり、畑地の開墾時に弥生時代中期の土器・扁平片石斧などが採取されて上野遺跡の存在が確認され、上野遺跡は、栗谷遺跡、或いは直浪遺跡とは異なった山間地に位置する遺跡として注目されている。

このあと古墳時代へ移行すると、共同体の支配者であった首長の死にあたって、壮大な高塚を築き多くの副葬品とともに手厚く埋葬する風習が広まり、因幡地方にも畿内的な様相をおびた大型の古墳が築造されるようになる。例えば、鳥取市の六部山3号墳・古郡家1号墳・栢間1号墳などが代表的な前方後円墳である。

福部村内でも、古くから数多く古墳の分布が確認されており、湯山古墳群をはじめ今回の分布調査で発見された前述の前方後円墳を含めて180基の古墳が10群にまとめられ、その分布は福部村内各地に点在し、形態は前方後円墳・方墳・円墳・横穴と多岐に渡るが、大半はラグーンを見下ろす丘陵の尾根に分布している。更に後期古墳に見られる横穴式石室は、平野部よりやや奥まった山間部に位置する特徴を示している。この他、蔵見2・3号墳の開口した横穴式石室周辺では、表面採集で県内でも数少ない7世紀中葉と推定される「四注家形」の陶棺片と中国地方の一部に限って分布が見られる須恵質の「鳥形瓶」が、全国で13例目として発見されており、日本最北（東）端の出土例として注目されている。

福部村内における古墳の発掘調査は、過去に5例あり、その殆どが開発に伴う調査である。特筆されるものとして、昭和52年に発掘調査を行なった湯山6号墳では、小札を柵の葉状に装飾した特異な「小札鋳留眉庇付冑と三角革綴短甲」などが出土している。

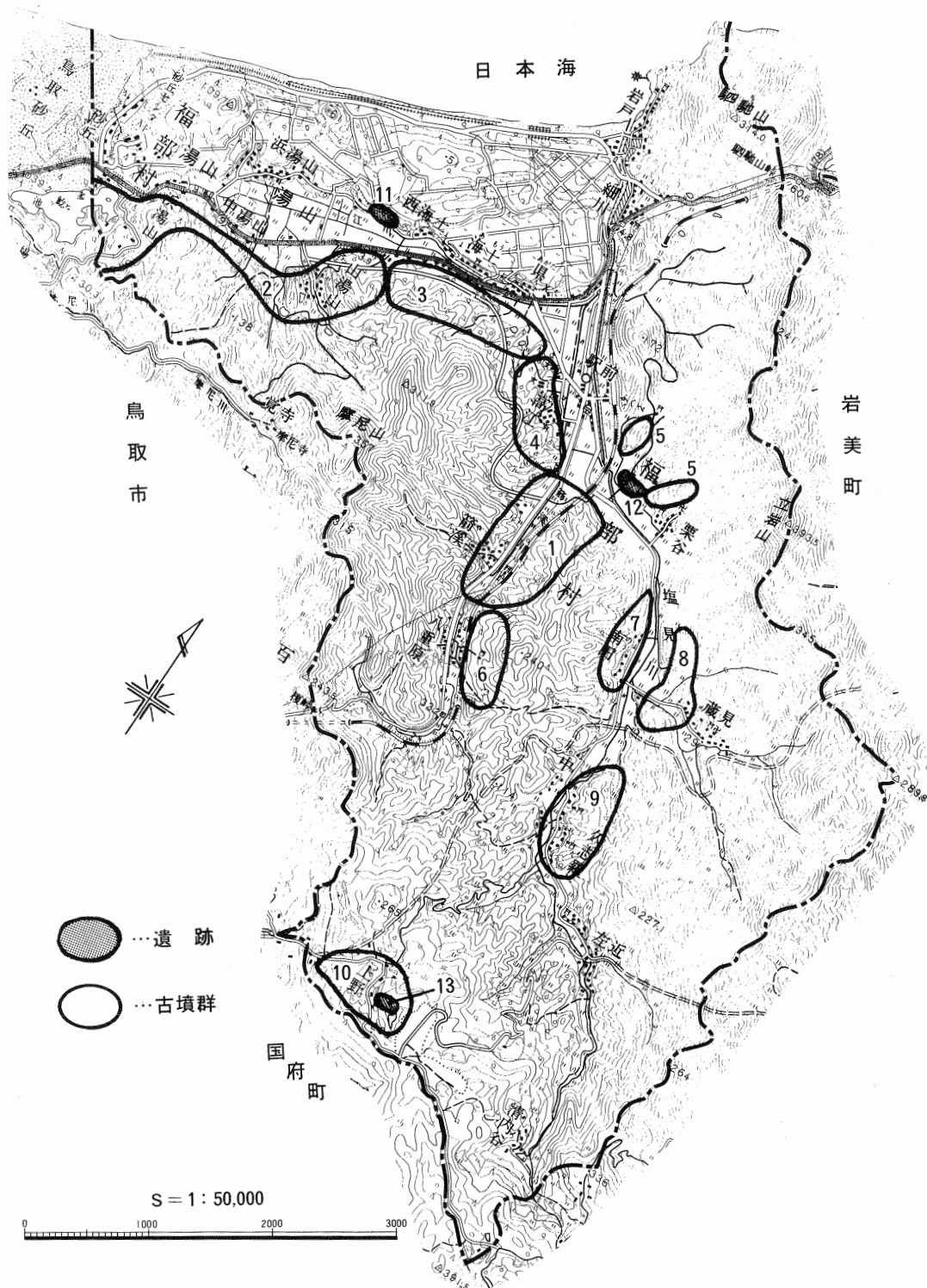
遺跡の発掘調査例は、昭和51年に直浪遺跡の中心部と思われていた地点から、約100m西へ寄った砂丘の後背台地で、採砂作業中の工事関係者によって「柱穴群」が発見された。福部村教育委員会による発掘調査の結果、5世紀から6世紀に渡り継続的に居住したと推定される竪穴住居跡・掘立柱状建築遺構を検出している。尚、この遺構は、調査終了後埋戻しが行なわれ、現在も保存されている。

古代に律令制が確立された時期には、福部村一帯は、^{いなばのくにほうみ} 因幡国法美郡服部郷^{はっとり}に属しており、^{あも} 海士^{やえぼら}と八重原には、式内社があった。岩美町の^{がもう} 蒲生川流域には条里制の地割が残り、国の史跡指定となっている白鳳期^{いっわい}の岩井廃寺塔跡も遺存し、上野山を越した隣町の岩美郡国府町中郷には因幡の国府が置かれている。

このように生活基盤が確立され、各地方に国府或いは郡家といった政治、経済を司る官衙が置かれると、国府と国府を結ぶ駅路・駅家も整備される。数例の^(註) 説の中で但馬から因幡の国府へ至る駅の一つに「佐尉駅」があり、候補地として古代の地形、^{こまがえり} 駒帰・上駒帰などの小字名から福部村細川付近に佐尉駅を想定している。

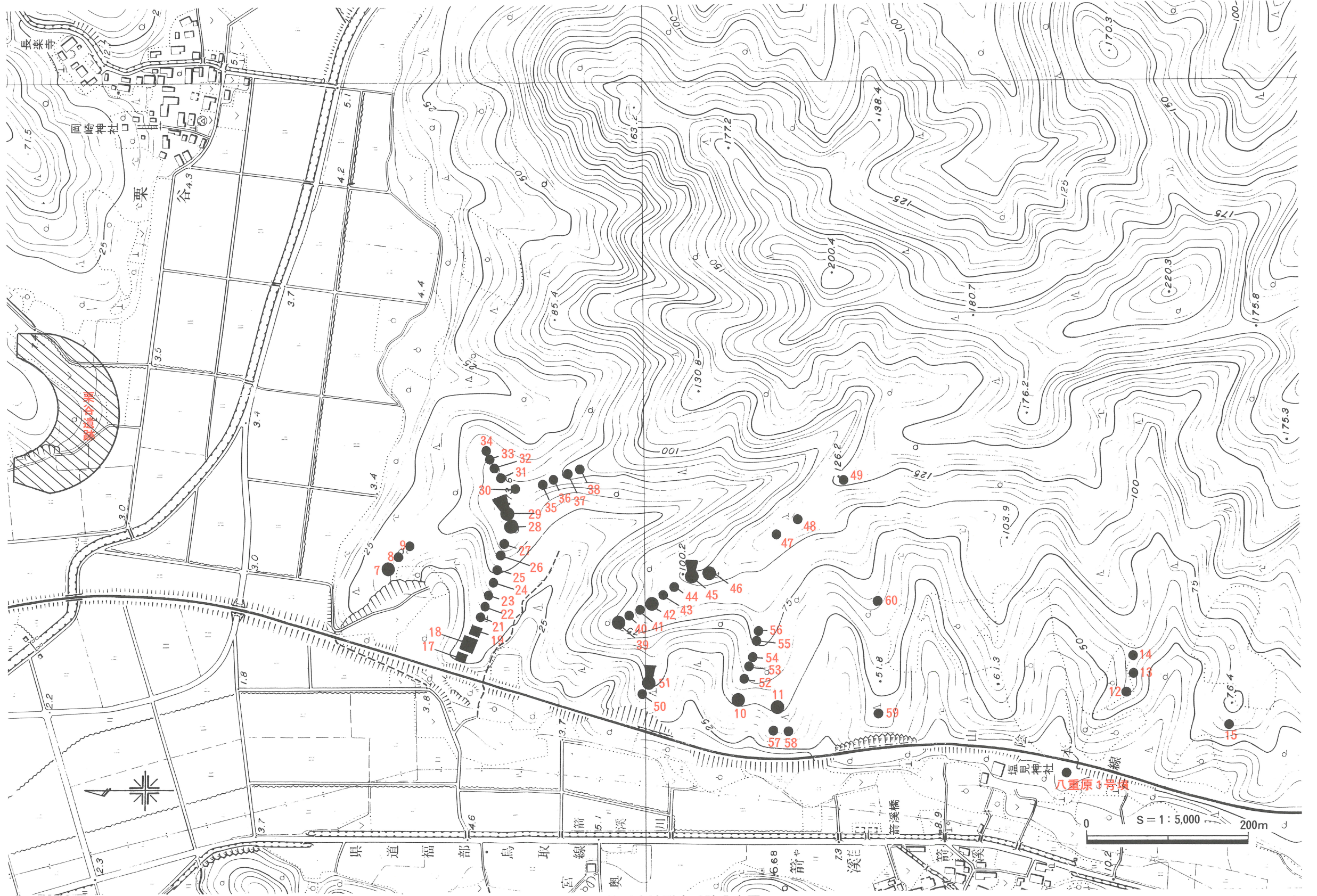
この他、国府町には、奈良時代の官立寺院である金光明四天王護国之寺（国分僧寺）、法華滅罪之寺（国分尼寺）が建立され、以後このあたりが因幡地方では国府を中核とした経済・文化交流の中心地として繁栄して行く。

註. 鳥取県『鳥取県史』第1巻P.481



- | | | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 箭溪古墳群 | 2. 湯山古墳群 | 3. 海士古墳群 | 4. 高江古墳群 | 5. 栗谷古墳群 |
| 6. 八重原古墳群 | 7. 南田古墳群 | 8. 蔵見古墳群 | 9. 久志羅古墳群 | 10. 上野古墳群 |
| 11. 直浪遺跡 | 12. 栗谷遺跡 | 13. 上野遺跡 | | |

挿図2. 村内遺跡分布図



挿図3 箭溪古墳群東丘陵分布図

箭溪古墳群分布図対象表

No.	県番号	古墳名	種類	規模(m) 直径×高さ 辺×辺×高	埋葬施設	出土遺物	備考
1	41	箭溪1号墳	円墳				
2	108	" 2号墳	円墳				
3	109	" 3号墳	円墳				
4	44	" 4号墳	円墳	16×1~2			
5	43	" 5号墳	円墳	17×1~2			
6	42	" 6号墳	円墳	10×1.5			
7	35	" 7号墳	円墳	10×1.2			
8	36	" 8号墳	円墳	12×1.4			
9	37	" 9号墳	円墳	8×1.3			
10	34	" 10号墳	円墳	12×1.4			
11	33	" 11号墳	円墳	12×1.6			
12	30	" 12号墳	円墳	10×1.4			
13	31	" 13号墳	円墳	12×1.4			
14	32	" 14号墳	円墳	8×1.4			
15	28	" 15号墳	円墳	10×1.2			
16	27	" 16号墳	円墳	14×1.4			
17	124	" 17号墳	方墳	13(推定)×0.8			鉄道建設により半壊
18	125	" 18号墳	方墳	17×20×0.8	組合せ箱式石棺2基 ・割竹形棺(柱穴3基)	弥生土器・土師器高坏 平瓦(近世)	平成3年度記録保存 調査
19	126	" 19号墳	方墳	14×14×2.0	箱式木棺	須恵器甕片	"
20	127	" 20号墳	円墳	10×2			
21	128	" 21号墳	円墳	10×1.5			
22	129	" 22号墳	円墳	10.5×2			
23	130	" 23号墳	円墳	11.5×1.8			
24	131	" 24号墳	円墳	9×1.8			
25	132	" 25号墳	円墳	14.5×5			
26	133	" 26号墳	円墳	12×2			
27	134	" 27号墳	円墳	14×1.2			
28	135	" 28号墳	円墳	15×1.5			
29	136	" 29号墳	前方後円墳	全長46×3.5			前方部に石材1点露出
30	137	" 30号墳	円墳	15×1.5			
31	138	" 31号墳	円墳	8×0.5			
32	139	" 32号墳	円墳	12×1			
33	140	" 33号墳	円墳	11×1			
34	141	" 34号墳	円墳	12×0.8			
35	142	" 35号墳	円墳	14×1.3			
36	143	" 36号墳	円墳	11×1.8			
37	144	" 37号墳	円墳	12×2			
38	145	" 38号墳	円墳	12×0.8			
39	146	" 39号墳	円墳	7×2			
40	147	" 40号墳	円墳	15×1.5			
41	148	" 41号墳	円墳	15×0.8			
42	149	" 42号墳	円墳	16×2.5			
43	150	" 43号墳	円墳	11×2			
44	151	" 44号墳	円墳	16.5×2.5			周辺に石材散乱
45	152	" 45号墳	前方後円墳	全長22×2.5	竪穴式石室		柱状石横積・盗掘穴
46	153	" 46号墳	円墳	18×1			
47	154	" 47号墳	円墳	17×2			
48	155	" 48号墳	円墳	18×1			
49	156	" 49号墳	円墳	17×1			
50	157	" 50号墳	円墳	7×1			
51	158	" 51号墳	前方後円墳	全長31×3			
52	159	" 52号墳	円墳	17×1.5			
53	160	" 53号墳	円墳	15×2			
54	161	" 54号墳	円墳	10×1.2			
55	162	" 55号墳	円墳	15×1			
56	163	" 56号墳	円墳	15×1			
57	164	" 57号墳	円墳	11×1			
58	165	" 58号墳	円墳	14×1.5			
59	166	" 59号墳	円墳	15×1.2			
60	167	" 60号墳	円墳	13×1.5			

第 III 章 箭 溪 古 墳 群

今回調査の対象となった箭溪古墳群が立地する通称「蔵の山」は、標高約205mの山頂から派生する尾根の主稜線から幾枝にも分れた支稜線が傾斜丘陵となって北西の県道福部・鳥取線と並行して流れる箭溪川に向かって舌状に延びる丘陵が連なっている。

60基で構成される古墳群はこの支稜線上に幾つかの支群を形成しているが、北の平野部に近く、今回の調査に至った丘陵に最も多く密集し、標高約77mのテラス状平坦地に築造された全長46mを測る前方後円墳（箭溪29号墳）を最高所として狭長な傾斜丘陵上に円墳と階段状の区画を有する墳丘12基が連なっている。この舌状に突出した丘陵を西平野部の水田地帯より遠望すると丘陵裾を南北横一文字にJR山陰本線の鉄路が延び、その直上に箭溪18・19号墳は立地する。

箭溪古墳群は、昭和51年に行われた分布調査により11基が周知の古墳として確認されていたが、今回の林道建設範囲に限定した踏査により、村内で最も多く密集することが確認された。従って、南西に連なる丘陵と、北東の栗谷遺跡を望む対岸の丘陵へ範囲を拡大して綿密な分布踏査が行われた場合、更に多くの古墳が発見をされる可能性を秘めている。又、このように多くの古墳が存在する反面、古墳群周辺には住居跡等を伴う遺跡の存在は未確認であり、早急に細密な分布調査が望まれる。

第 IV 章 発掘調査の概要

この調査対象となった箭溪18・19号墳の立地する丘陵は、幹周りが大きなもので120cm程度のコナラを主体とする落葉高木で、斜面の下表はウラジロと矢竹が群生し、落葉後に向いの北東丘陵から遠望すると墳形の輪郭が明瞭に観察出来る。

丘陵の北に面する溪谷には杉林の植林・果樹園・畑地が僅かに営まれ、向いの北東丘陵は、明治時代の山陰本線建設に伴う築堤建設による採土によって先端から高さ約20m・幅約100mが赤褐色土の切壁を曝している。丘陵の南西に面する溪谷には休耕田が放置され、丘陵の迫った日照の短い所では杉林の植林に変貌している。更にこの杉林の小道を抜けて谷合を奥へ登り詰めると溪谷は扇状に開け、現在は梨園が耕作されている。この付近は地元箭溪地区の人々から「蔵千軒」と呼ばれ伝えられている溪谷で、近世の頃と思われる民家の痕跡を残す階段状の石垣が点在し、千軒の集落が実在したとは考えられないが、溪谷の広さから、少なくとも十数戸の集落が形成されていたと考えられ、人々は当古墳が立地する丘陵の直下を往来していたとは間違いないようである。

箭溪18号墳の墳丘は、北西の箭溪川を挟んだ対岸（約200m）の箭溪集落との比高差は

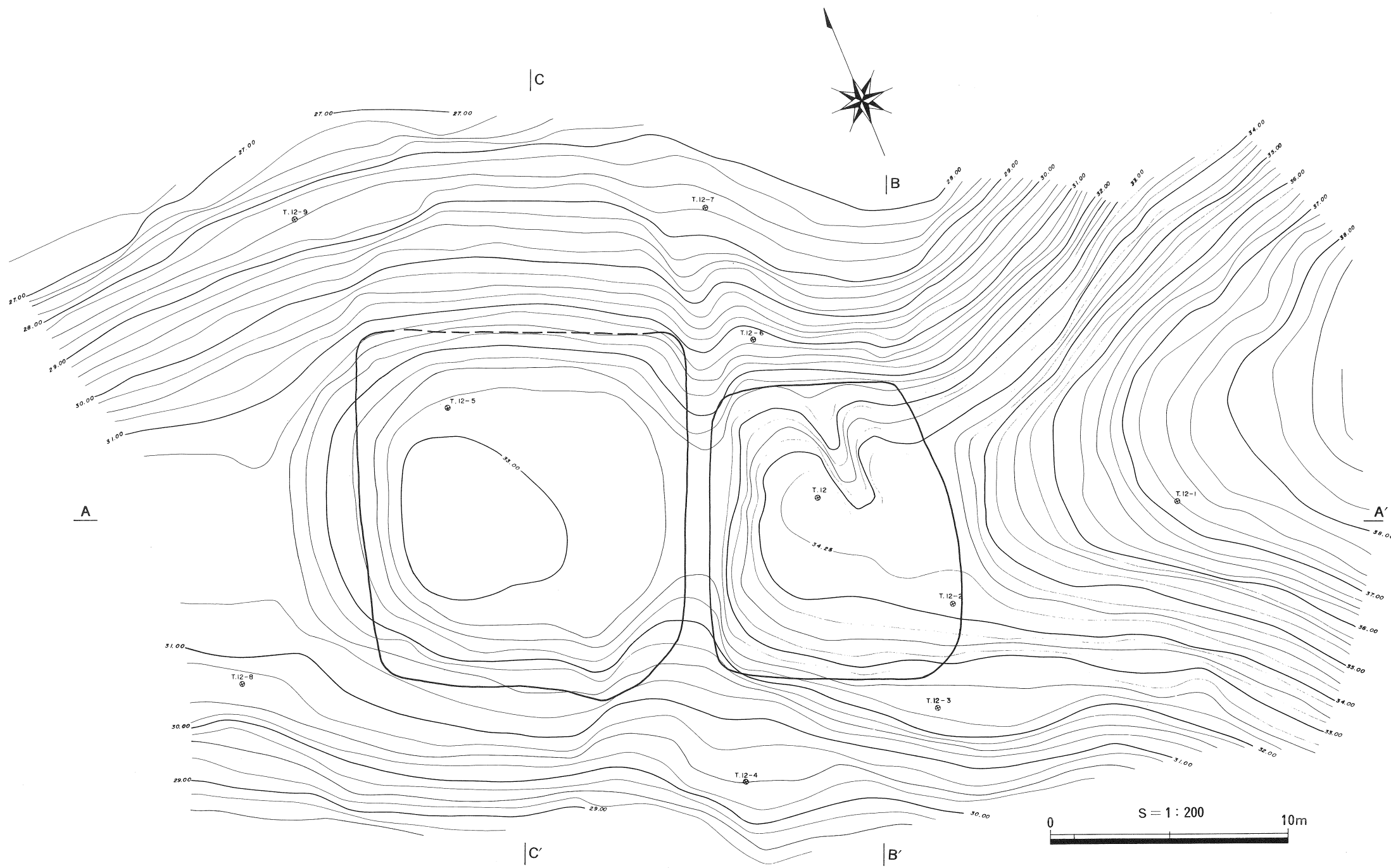
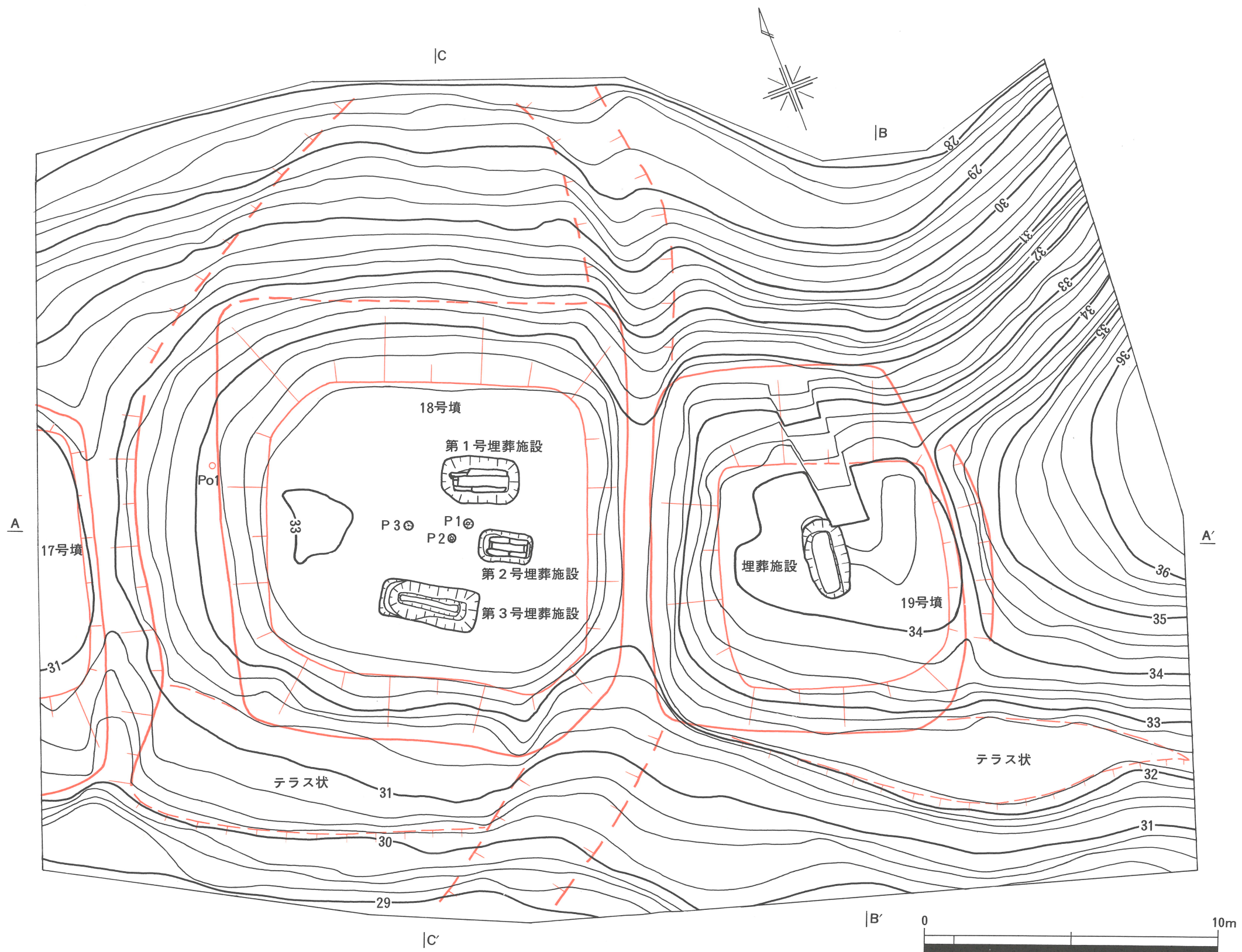


插图4 箭溪18·19号填地形实测图



挿図5 箭溪18・19号墳墳丘遺存図

約28mを測り、19号墳は更に約1.2mの高所に位置し、墳丘は前述のとおり遠望しても墳丘・周溝ともにその痕跡がたどれる古墳で、墳丘は明瞭な方形を呈し、築造に当ってはこの地方に最も多く見られる自然丘陵を削り、整形と盛土を施した後、周溝によってその墓域を区画設定したものと考えられる。

両古墳とも埋葬施設は確認され、18号墳の墳丘上で組合せ箱式石棺2基と割竹形木棺1基、更に3基のピットを検出した。19号墳では箱式木棺1基を検出したが、両古墳とも墳頂部を中心に盗掘によると推定される削平が認められ、埋葬状況を明確に把握することが不可能な主体部もあった。

検出された出土遺物は極めて少なく、18号墳の表土中より近世の平瓦片と盗掘により削平された墳丘上の攪乱層で土師質の高坏片、第3号埋葬施設検出された線刻礫及び周溝内から弥生土器片、19号墳墳頂部の攪乱層で須恵器の甕片が出土したのみである。

第1節 箭溪18号墳（挿図4～11、図版2～4）

箭溪18号墳は、後述の19号墳と並んで東から西へ延びる丘陵尾根が標高34m付近でやや北東方向に主軸が屈曲した所に位置し、南東側を19号墳、北西側を調査対象外で鉄道建設によって半壊状態となっている尾根末端の17号墳と接している。墳丘の規模は、一辺が15m程度で此の地方では中規模に該当する方墳で、墳頂部の標高は33mを測り、墳丘の主軸は尾根の主軸線に直交し、南西辺墳端部に狭長のテラス状の平地が形成されている。このテラス状の平地は、19号墳の場合も同様の位置に存在し、尾根の最高峰に位置する前述の（箭溪29号墳）の南墳端部にもかなり広いテラス状の平地が存在する。このことからテラス状平坦地は、墳丘の中心軸を尾根稜線から北東にずらし、テラス状平坦地を付属させることによって、福部平野から遠望した際に墳丘が強調されるよう古墳を築造したと推測される。墳丘の主軸はN-22°-Eをとる。

古墳の墓域を画す周溝は、尾根の主軸にほぼ直交して南東辺、北東辺、北西辺の3辺を巡ることが確認されたが、南西辺では周溝の痕跡は認められず地山をカットして墳丘を削りだし、尾根に並行した狭長のテラス状平地が形成されている。南東辺の周溝断面は、逆台形状を呈し、19号墳と共有して築造されているように見受けられたが、東コーナーで18号墳の周溝を切った切り合い面が僅かに検出され、周溝内には19号墳からの流土と推定される赤褐色ブロック混土層が厚く堆積し、墳丘を築造後比較的短期間で埋没したと推定される。このことは、築造可能な狭い丘陵面に18号墳が築造され、後に19号墳が築造されたことを示唆している。北東辺、北西辺の周溝は、流失が著しくし薄浅で僅かに痕跡として残る程度であるが、北西辺の底面から複合口縁部に竹管文を施した弥生土器P01が検出された。北西辺の周溝下斜面は、緩やかなスロープ状を呈して下降し、今回の調査対象外

である北西の17号墳の墓域を示す周溝まで続き、周溝内には本墳から腐食土が流土となって黒灰色土層が厚く堆積していた。

墳丘の築造にあたっては、狭長の丘陵の南東部を大きくカットして、北西辺に盛土を施し、南東辺周溝を穿って北東辺肩部に盛土を施し、南東・北西の軸線上をほぼ水平状態にした後、南西辺を掘削してテラス状平坦面を形成し、北東辺と南西辺の肩部に盛土を施して墳形を整えている。この際、第1・2号埋葬施設は盗掘による攪乱と墓壇面が比較的浅いことにより不明であるが、南西寄りの3号埋葬施設はこの盛土施工前に埋葬が行われていたことが窺われる。この後北東辺と北西辺に周溝を掘削と盛土によって構築したと思われるが、流失が著しく不明瞭である。

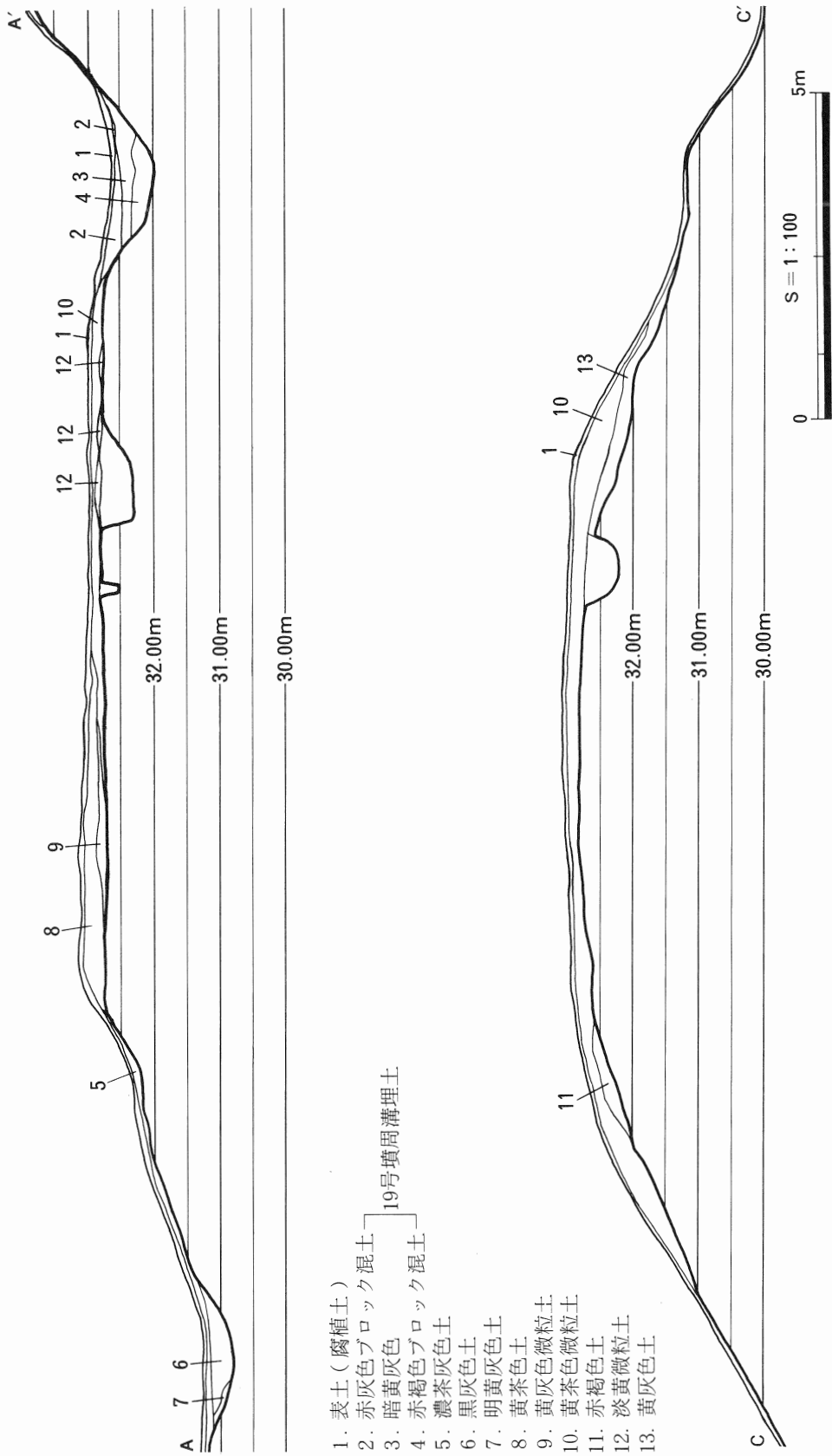
墳丘の規模は、南東・北西軸線上で13.1m、北東・南西軸線上で15.0mを測り、南東辺の周溝底面から墳丘の肩までの高さは90cmと浅い。北西辺の周溝の底面から墳丘肩までの高さは90cmを測る。南西辺は、テラス状の平地から墳丘へ立ち上がる点を墳端部とした場合、墳丘肩までの高さは1.5mを測り、北東辺の周溝底面から墳丘の肩までの高さは1.8mと他の辺と比較して最も深く、南東・北西辺と比較するとかなりの落差が認められる。

墳頂部は、極端に双方の肩部まで水平に近い平坦面を呈し、盗掘時にかなりの削平を受けていることが窺われるが、南東・北西径10.9m、北東・南西径10.0mを測る。墳形は前述のとおり狭い自然丘陵を活用して隣接する墳丘が密着同然の築造方法と墳丘を強調しようとする意図的配慮からほぼ均整のとれた墳形で、明確な隅丸方形を呈している。

検出された遺構は、墳頂部の墳丘軸線を挟んで2基の組合せ箱式石棺、南西墳頂部で1基の割竹形木棺と推定される埋葬施設を検出し、墳頂部中央部で3基のピット遺構が検出され、更に北東辺の周溝下斜面で墓道若しくは山道と推定される溝状の痕跡を確認した。

墳丘からは埴輪、葺石等の外表施設は検出されなかったが、墳頂部中央部分の攪乱層で高杯P02が検出されたことから供献土器（どの埋葬施設に伴うものかは不明）であった可能性もある。

第1号埋葬施設（挿図7、図版6）は、墳頂部平坦面の中央部より僅かに東に寄せて組合せ箱式石棺が設けられている。この主体部は、前述のとおり盗掘を受けており、表土を除去後まもなく検出されたが、主体部上面の封土は削平を受けて蓋石は既に持ち去られて両側石と北西小口石のみが墳頂部の東側で検出され、主軸はN-67°-Wをとり、墳丘の軸線とはほぼ同じくする。これにより墳頂部にかかなりの削平が及んでいると推定され、築造当時の墓壇掘り方面は不明であるが、検出面での墓壇の長さは268cm、幅161cm、深さ40cmを測り、隅丸長方形を呈している。この墓壇中央部の底面の長さは193cm、幅77cmで、この掘り込み底面の側辺に目一杯寄せて、淡灰色を呈する石英安山岩(Dacite)の厚板状石を用いた組合せ箱式石棺が納められていた。石棺は南東の小口石が盗掘により抜き取られて



挿図 6 箭溪18号墳填丘土層断面図

いるが、内法で長さ155cm(推定)、南東側幅36cm、中央側幅35cm、北西側幅34cm、深さは南東で39cm、中央で35cm、北西で33cmを測る。小口石、側石ともに掘り方は無く、柱状節理に沿った平面を墓壇底面に据え、重厚な両側石は中央より南西に寄った所で2石を継ぎ合わせ、北西の小口石を挟み込むように立てられている。北西の小口石は重厚な両側石に比較すると貧弱で、短辺の扁平石2石を差し込むように継ぎ合わせて立てられている。このことから、両側石南東端部が墓壇の掘り方底面ぎりぎりまで達していることなどの要因により、南東部に遺存していたであろう小口も同様に、側石が挟み込んでいたと推定される。石棺の組立て順序は、側石の重なり配置から南東の長い両側石の端部の面を揃えて、墓壇底面両サイドに最大限まで広げて据え、北西の側石を継ぎ足して据えている。従って北西の側石端部の面は揃っていない。次に主となる小口石を節理に沿って据え、不足の間を先細りする節理面を有する短石を差し込むように組み込んでいったと考えられる。墓壇の掘り方と石棺材の間は赤褐色軟質土で埋戻され、石材の接合面にできる隙間には、特に粘土の目張りを施した痕跡見られなかった。石棺内は、盗掘により蓋石が無かった為、淡黄色の微粒土が流土となって掘方底面まで堆積し、人骨、副葬品ともに遺存していなかったが、頭位は上述の側石配置と内法状況から南東位と考えられる。

第2号埋葬施設(挿図8、図版6)は、18号墳で最も規模の小さい埋葬施設で、墳頂部平坦面の中央部より僅かに南東に寄せて組合せ箱式石棺が設けられている。この主体部は、第1号埋葬施設と同様に盗掘を受けており、主体部上面の封土は削平を受けて蓋石は持ち去られ、両側石と両小口石が検出された。主軸はN-65°-Wをとる。表土を除去後第1号埋葬施設と同レベルで両側石と小口石の上部が検出された為、1号埋葬施設と同様に築造当時の墓壇掘り方面は不明であるが、検出面での墓壇の長さは182cm、幅100cm、深さ30cmを測り、隅丸長方形を呈している。この墓壇中央部の底面の長さは163cm、幅66cmで、掘り込み底面の側辺に目一杯寄せて、淡灰色を呈する石英安山岩の厚板状石を用いた組合せ箱式石棺が納められていた。石棺は、内法で長さ110cm、南東側幅24cm、中央側幅27cm、北西側幅20cm、深さは南東で24cm、中央で28cm、北西で25cmを測り、第1号埋葬施設と比較して極端に小さな主体部である。小口石、側石ともに掘り方は無く、柱状節理による平面を墓壇底面に据え、両側石はほぼ中央で2石を継ぎ合わせ、両小口石を挟み込むように立てられている。小口石は重厚な両側に比較すると貧弱で、南東の小口が2枚北西の小口に1枚の小扁平石を挟み込んで立てられている。石棺の組立て順序は、側石の重なりから南東の主となる小口石を据え、南東の両側石の端部の面を揃えて先に据えた小口石を挟み込むように据え、南角にできた小口石と側石との隙間を扁平石で補強している。次ぎに北西小口石を据え、北西の側石を継ぎ足して据たと考えられる。従って北西の側石端部の面は揃っていない。墓壇の掘り方と石棺材の間は赤褐色軟質土で埋戻され、石材の接合面に

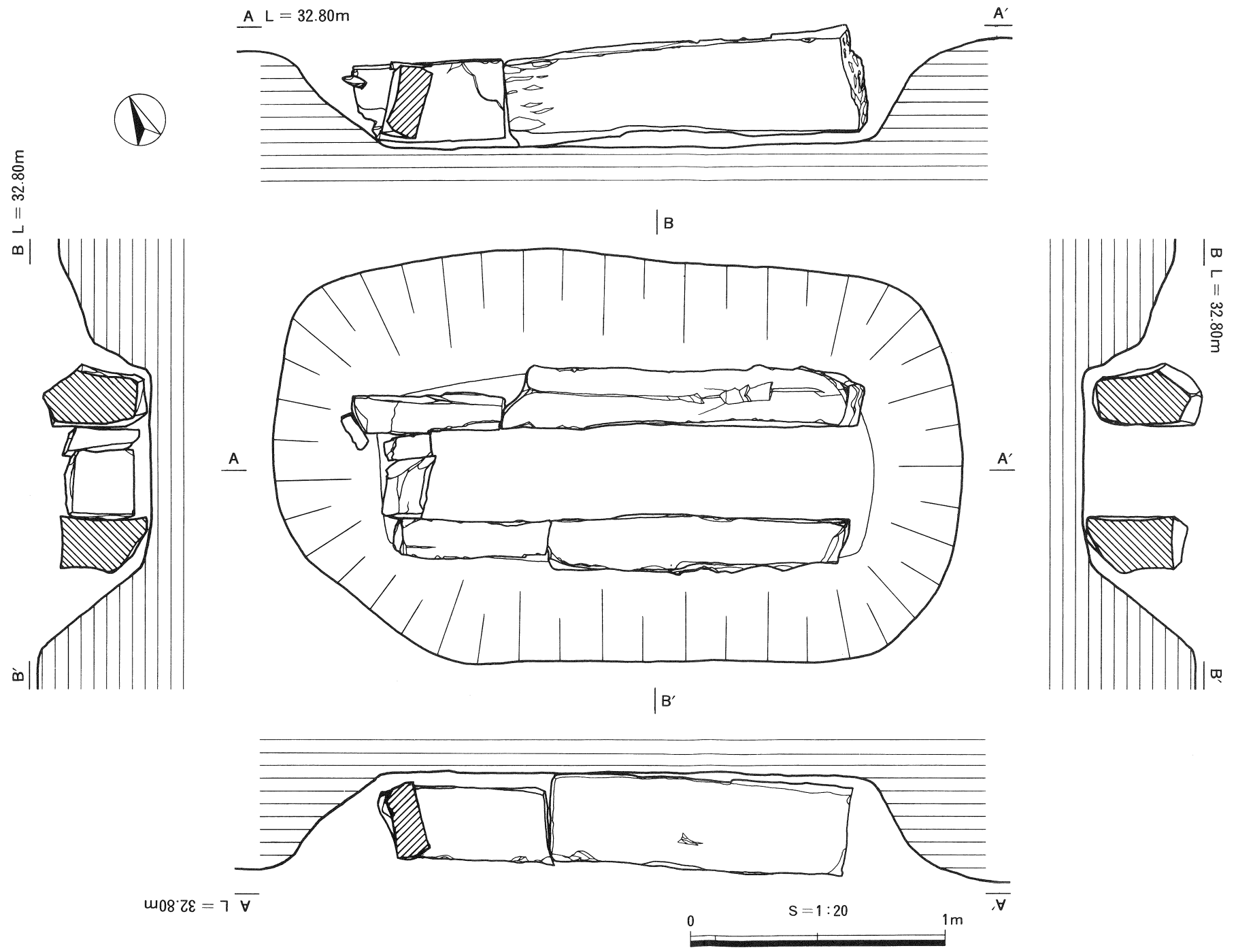
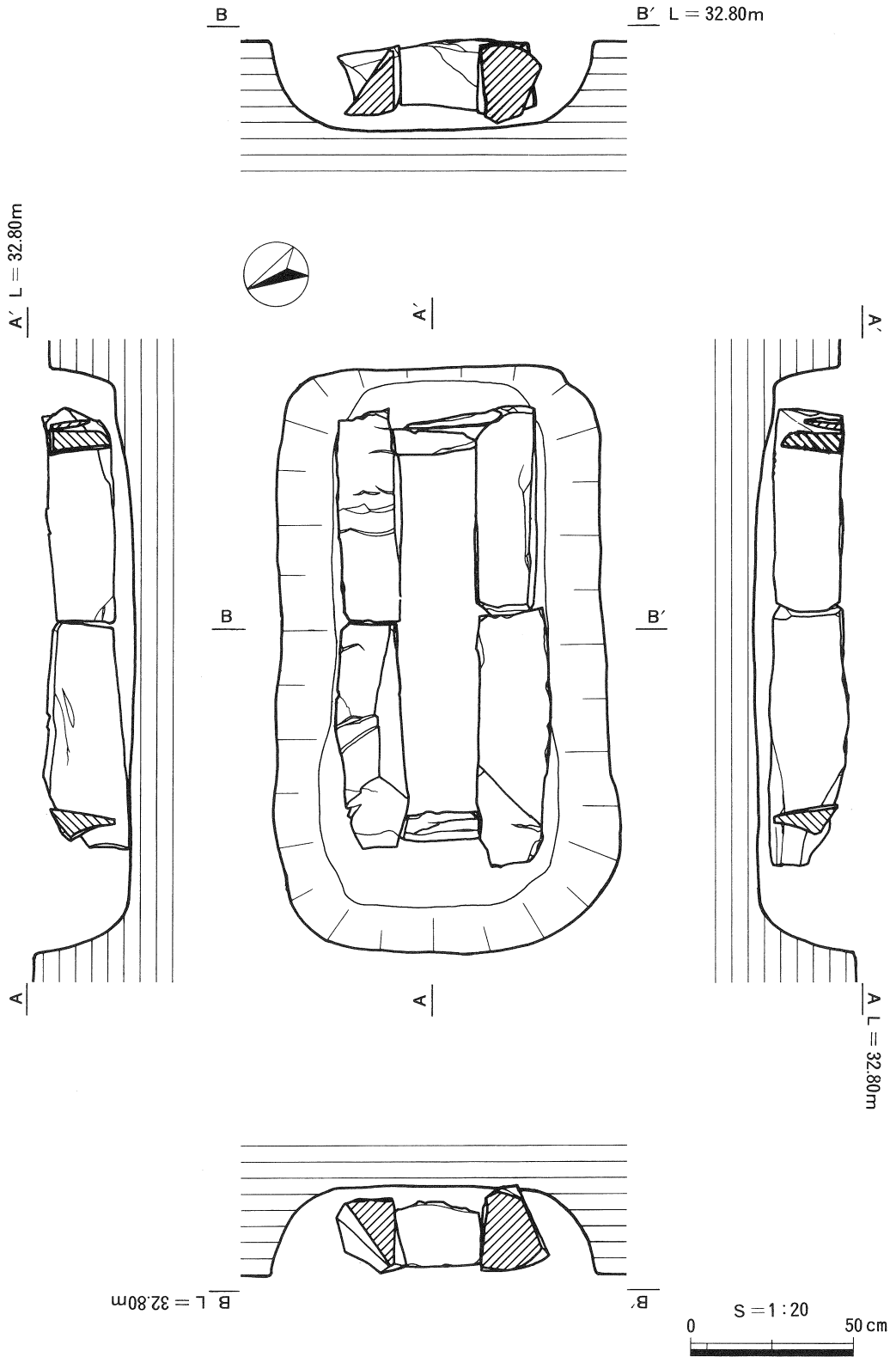


插图7 箭溪18号墳第1号埋葬施設(石棺)実測図



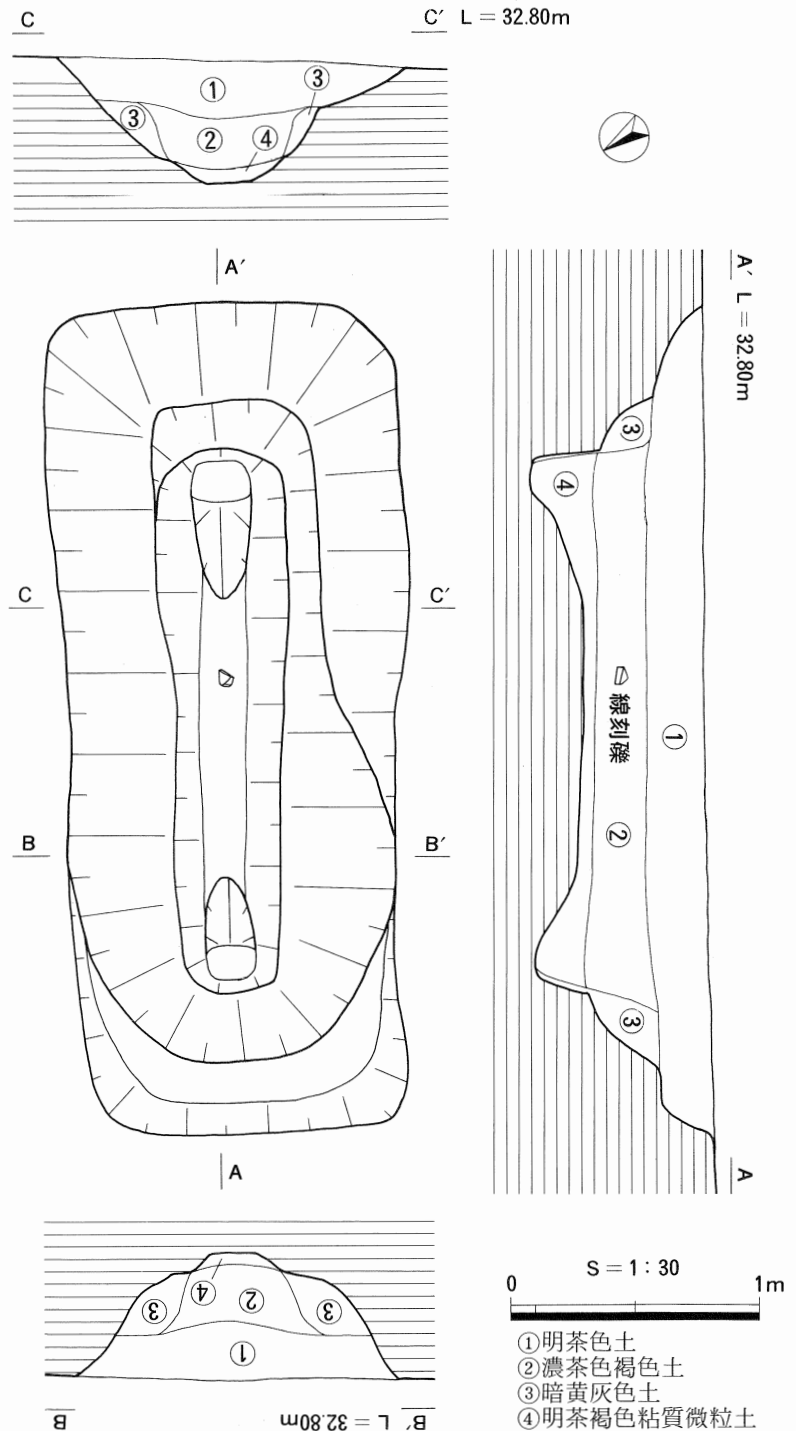
挿図 8 箭溪18号墳第 2 号埋葬施設 (石棺) 実測図

できる隙間には、特に粘土の目張りを施した痕跡見られなかった。石棺内は、盗堀により蓋石が無かった為、黄灰色の流土が掘方底面まで堆積し、人骨、副葬品ともに遺存していなかったが、頭位は上述の側石配置と内法状況から南東位と考えられる。

第3号埋葬施設

(挿図9、図版7)

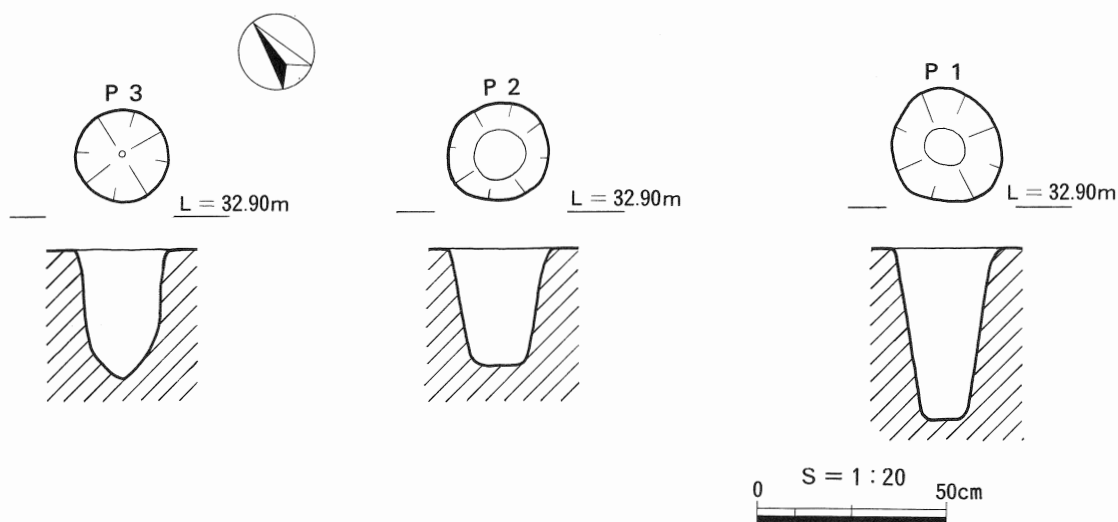
は、墳頂部平坦面の中央部より南西寄りで検出され、主軸はN-59°-Wをとり、墳丘の主軸より9°南西に振っている。墓壙は、上縁部で長さ3.35m、幅140~129cm、深さ20cmを測り、この隅丸長方形の墓壙を更に長さ2.68m、幅65cm、深さ25cmまで掘り込んだ2段掘の墓壙に穿たれ、外法の長さ2.08m、幅43cm、と推定される割竹形木棺の底面と両小口板の痕跡が検出された。側板の痕跡は検出されなかったが、構築にあたっては、深く掘り込まれた両小口板の痕跡から、現地で小口板を掘り込み面



挿図9 箭溪18号墳第3号埋葬施設(割竹形木棺)実測図

に埋め立て側板の端部で挟み込んでいたと推定される。本埋葬施設は、他の埋葬施設（組合せ箱式石棺）のように盗掘を受けて攪乱された様相は無く、木棺の腐朽化による安定した流入土と推定される堆積を示し、棺上に置かれていたと推定される3条の線刻を有する幼児の握り拳大の角礫が1点混入していた。棺内に相当する床面付近には人骨、副葬品ともに遺存していなかった為、頭位或いは時期設定をする手掛かりは得られなかった。

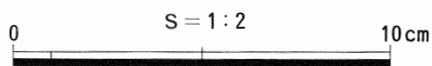
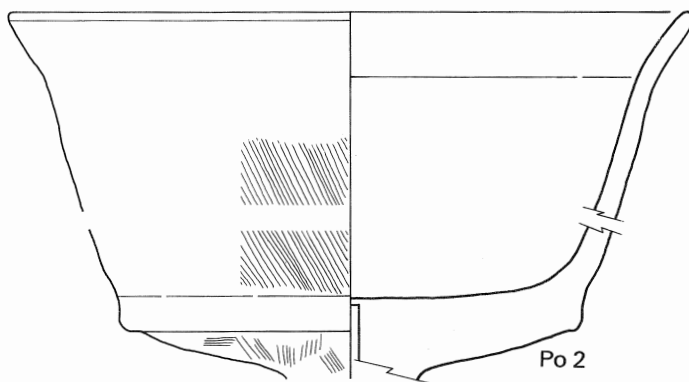
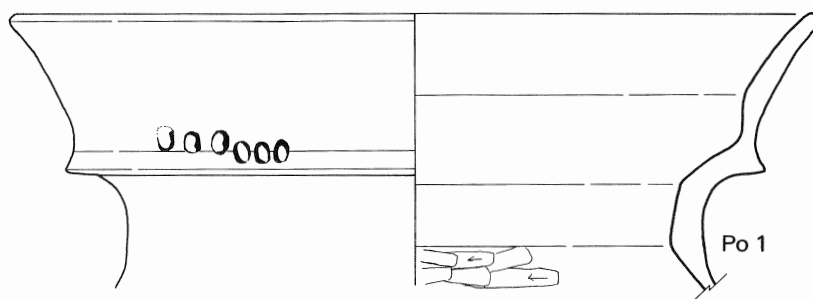
ピット遺構（挿図10、図版7）は、墳頂部中央のほぼ主軸線上で、3基の埋葬施設に囲まれるように3基検出された。P1は墳頂部中央のやや東寄りで検出され、掘り込み平面の口径は31cm～28cmでやや楕円形を呈し、深さは45cmを測る。底径は11cm～9cmで平らな皿状の楕円形で、断面形は逆台形状を呈して地山を掘り込んでいる。P2は墳頂部中央のやや南寄りで検出され、掘り込み平面の口径は27cmのほぼ円形で、深さは31cmでP1に比較してやや浅い。底径は31cmで平らな皿状の円形で、断面形は逆台形状を呈して地山を掘り込んでいる。P3は墳頂部中央のやや北西寄りで検出され、掘り込み平面の口径は25cmの円形で、深さは35cmを測り、底面は先細りで、断面形はV字形を呈して地山を掘り込んでいる。3基のピット遺構には、淡赤灰色の埋土が堆積し、口径、断面形態から柱穴の可能性が強いが、柱穴として想定した場合相互の間隔と配置では建物状の遺構にはなりえないものである。従ってピット遺構の用途などは不明である。



挿図10 箭溪18号墳ピット遺構図

墓道若しくは山道の痕跡は、北東辺の隣丘陵から遠望観察してその輪郭を捕らえることが出来るもので、南東辺の周溝と北西の17号墳の周溝コーナーから斜面を薄浅で内湾下降して本墳丘直下でネックレス状に交わる痕跡が認められるが、流失が著しく明確にコンタラインに表れていない。（図版2）

出土遺物（挿図11）は、極めて少なく北西辺の周溝内の底面で検出した甕（P01）と墳頂部から出土した高坏（P02）、第3埋葬施設から検出された線刻礫である。P01は、やや外反する複合口縁を有する弥生時代終末期と推定される甕で、口縁端部はつまみ出すように平坦面をつくり、屈曲部の稜は鋭くやや下垂している。外面は、ヨコナデ後磨きを施し屈曲部に6単位以上の不規則な竹管刺突文を一定間隔に施す。内面は、口縁から屈曲部にかけてヨコナデ、屈曲部から肩部までヘラケズリが施されている。胎土は0.5mm程度の石英を多く含んだ砂粒が混入し、焼成は良好で淡明褐色である。P02は、古墳時代中期と推定される土師質の高坏で坏部が直線的に外上方へ伸び、端部を外反させ、底面やや外反し、鋭く屈曲して底部に至る。底部は極端に肥厚し、脚基部で欠損している。外



挿図11 箭溪18号墳出土遺物実測図

面はやや粗雑で坏部底面から屈曲部に向け、左上方に向けて規則的なハケ目を施し、底部は基部を取り巻くように不規則なタテハケとヨコハケが施されている。脚部と坏部の接合は坏部に脚部を挿入しており、接合部に小円孔が残る。内面は坏部にヨコナデが施されているが、底面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土は、微粒の石英と雲母を含み焼成はやや不良で黄赤色である。線刻礫は、幼児の握り拳大の扁平角礫で、岩石名は閃緑玢岩（センリョクヒンガン）と思われるが、風化が著しく線刻面は他の粗い面に比べやや平面的に研がれた様相を呈し、上下関係及び線刻の意味は不明であるが、線刻と思われる3条の線刻痕を有している。 註：線刻については、〔赤木教授より「確証は無いが、線刻のように思われる。」とのコメントをいただいている。〕

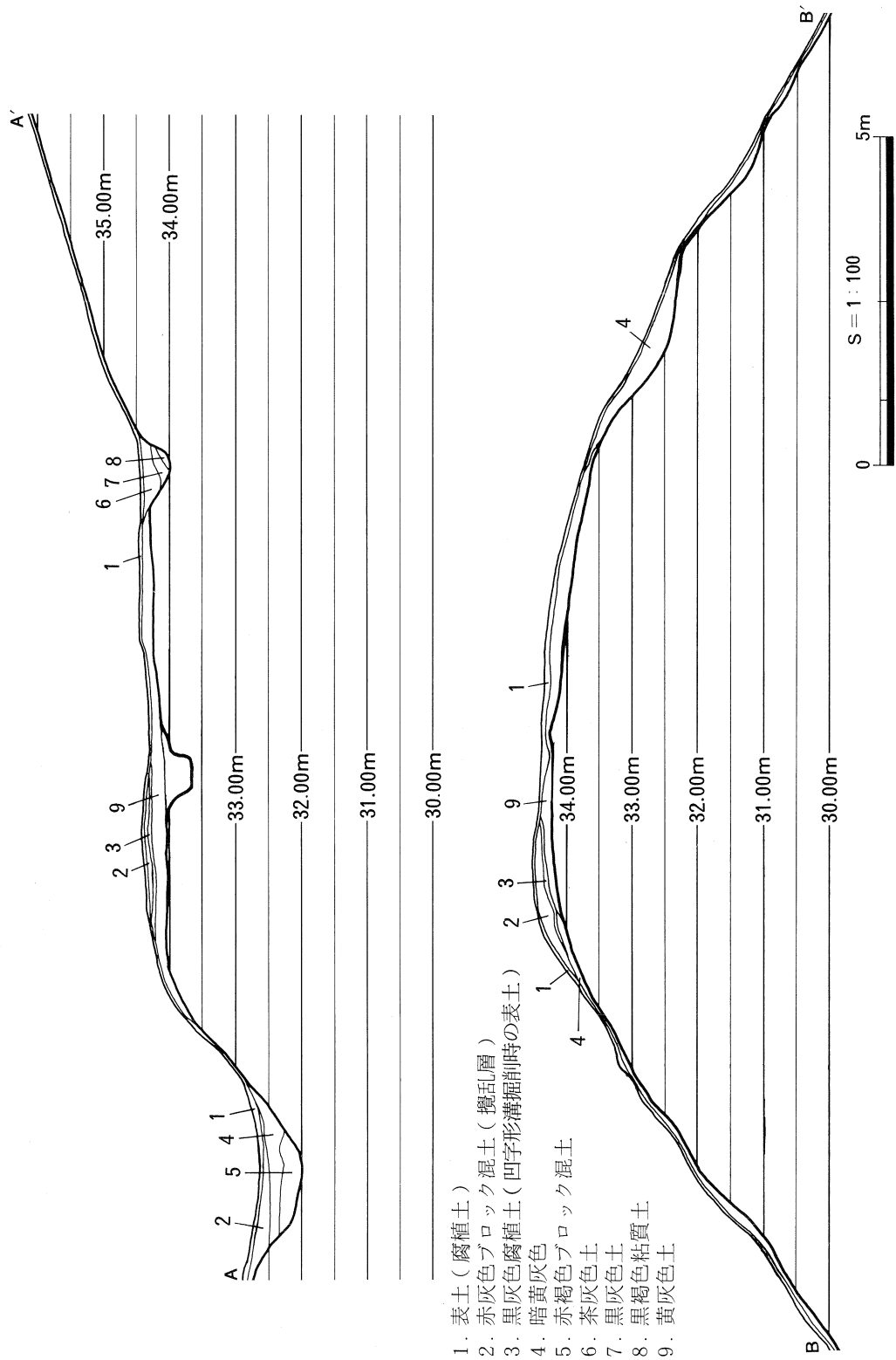
第2節 箭溪19号墳（挿図4・5・12～14、図版2～4）

箭溪19号墳は、前述の18号墳と同様に稜線の主軸に対し墳丘の中心軸を意図的に北東へ振って築造したと推測され、墳丘の主軸はN-22°-Eをとる。

古墳の墓域を画す周溝は、南東辺が尾根の屈曲部にあたり、上方尾根の主軸に直交して穿たれ、墳形を極端に歪なものとしている。北西辺は18号墳の節で述べたように18号墳の周溝を切って穿たれ、北東辺は流失の為痕跡として推定出来る程度である。南西辺では堀割の痕跡は認められず地山をカットして墳丘を削りだし、尾根に並行した狭長のテラス状平地が形成されている。南東辺の周溝は、やや開いたV字状を呈し、周溝内には上方尾根からの流土が厚く堆積していた。北東辺は、墳丘の中心部かけて長さ5m、幅1.3mの明らかに人為的な鋭い凹字形の溝が掘られている。この切開面には墳丘上に見るような腐葉土の堆積は極僅かで、古墳築造時より遥かに後世のものとの判断はできるが、この凹壁断面からの土層観察では埋葬主体部の痕跡は認められず、盗掘を目的としたものではないと思われる。

墳丘の築造にあたっては、狭長の丘陵の南東部を大きくカットして、南東辺周溝を穿って北西辺と南西に盛土を施し、南西辺を掘削してテラス状平坦面を形成し、南西辺の肩部に盛土を施して墳頂部をほぼ水平状態にし墳形を整えていると考えられるが、特に南西側に流失が著しく認められる。この際、埋葬施設はこの盛土施工前に埋葬が行われていたことが窺われる。この後北西辺の18号墳周溝埋土を浚え僅かながら既設の周溝を深くしてこの19号墳に取り込んでいる。北東辺は周溝を掘削と盛土によって構築したと思われるが、流失が著しく不明瞭である。

墳丘の規模は、南東・北西軸線上で10.4m、北東・南西軸線上で10.5mを測り、南東辺の周溝底面から墳丘の肩までの高さは41cmと浅い。北西辺の周溝の底面から墳丘肩までの高さは2.2mで南東辺と比較するとかなりの落差が認められる。南西辺は、テラス状の平



挿図12 箭溪19号墳丘土層断面図

地から墳丘へ立ち上がる点を墳端部とした場合、墳丘肩までの高さは1.1mで、北東辺の周溝底面から墳丘の肩までの高さは1.1mを測る。

墳頂部は、平坦面を呈し盗掘時にかなりの削平を受けていることが窺われるが、南東・北西径7.7m、北東・南西径7.6mを測る。墳形は前述のとおり南東辺が尾根の屈曲部にあたり、上方尾根の主軸に直交して周溝が穿たれ、墳形を極端に歪なものとしているが、他の3辺は18号墳を意識しており、全体としては隅丸方形を呈している。

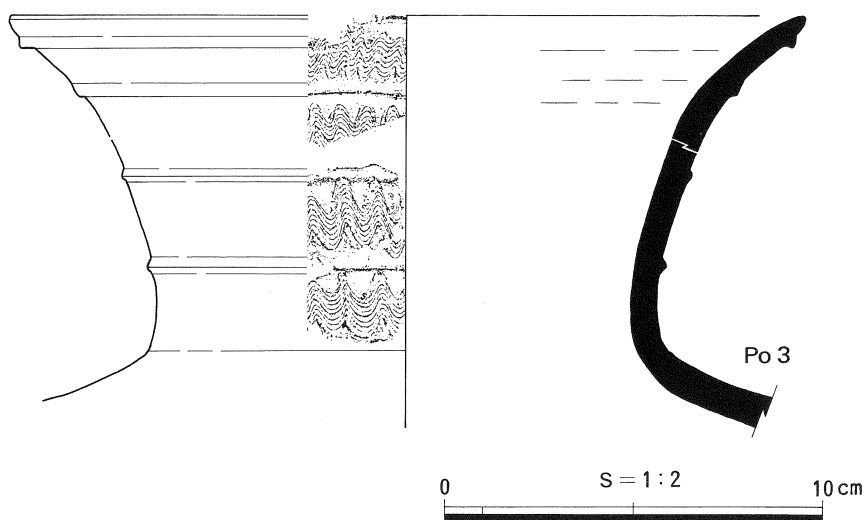
検出された埋葬施設としては、墳頂部で墳丘主軸線を挟んで1基の箱式木棺の痕跡が検出された。

墳丘からは埴輪、葺石等の外表施設は検出されなかったが、盗掘と思われる攪乱を受けた墳頂部中央部分で須恵器の甕P03が細片となって検出された。ことから埋葬に伴う供献土器であった可能性もある。

埋葬施設（挿図14、図版8）は、墳頂部平坦面の中央部の主軸線上で検出され、主軸はN-10°-Eをとる。墓壙は、上縁部で長さ2.79m、幅1.40~1.08cm、深さ57cmを測る。この長楕円形の墓壙は、南東面と北東側が2段に穿たれていた。底面では南西の小口面は検出されなかったが、両側板と北東小口面の痕跡が検出され、外法の長さ1.9m、幅60cm、と推定される箱式木棺の痕跡が検出された。本埋葬施設は、盗掘を受けて攪乱された様相は無く、木棺の腐朽化による流入土と推定される土層堆積を示していたが、木棺内に相当する床面付近には人骨、副葬品ともに遺存していなかった為、頭位或いは埋葬時期を特定をする手掛かりは得られなかった。

出土遺物は、墳頂部の攪乱層から細片となって出土した須恵器甕（P03）のみである。

P03の復元可能な部位は、口縁から肩部にかけてであり、口縁部直径21.1cm復元を測る。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、肩はあまり張らない。肩部から口縁部につ



挿図13 箭溪19号墳出土遺物実測図

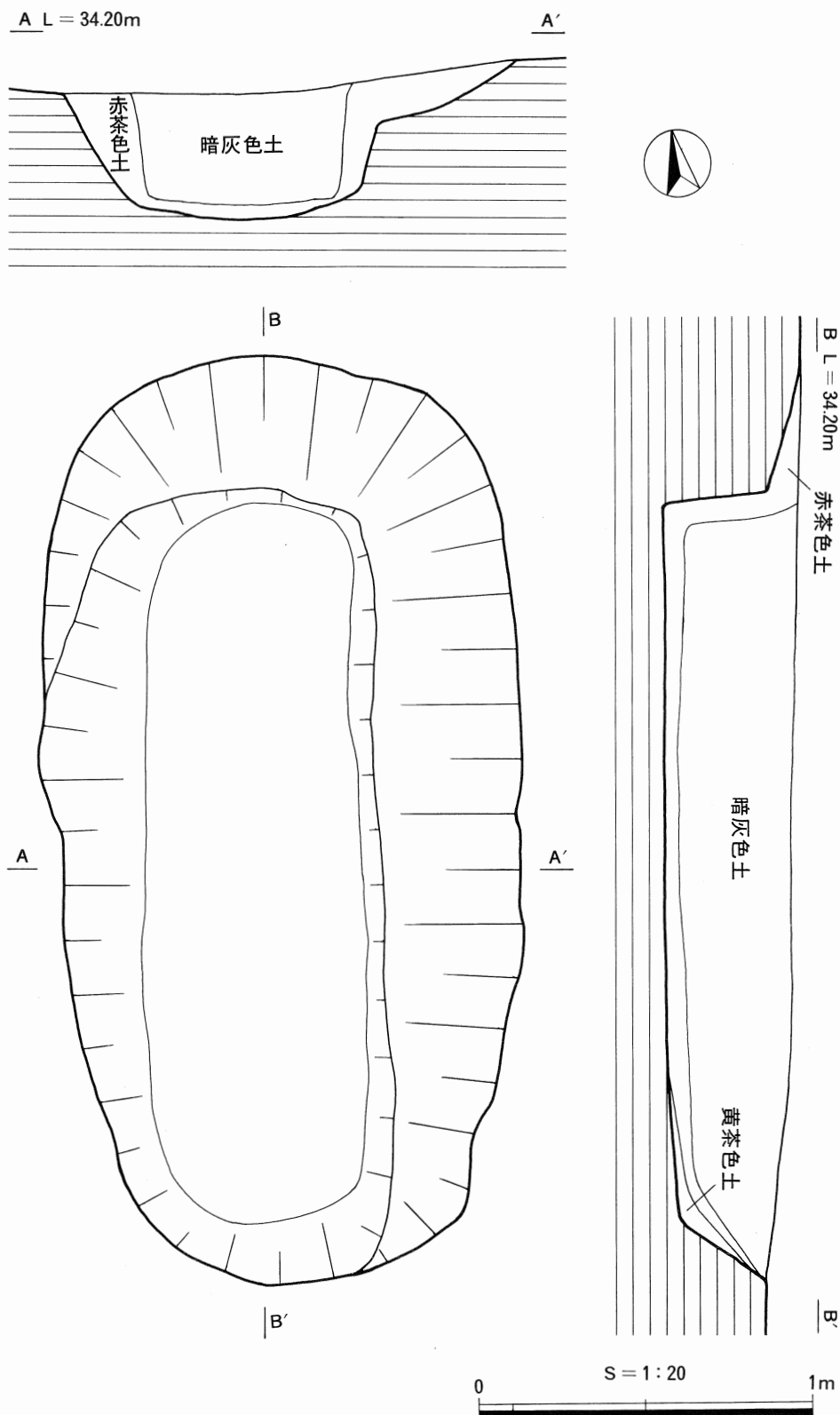


插图14 箭溪19号墳埋葬施設（木棺）実測図

ては一樣にやや厚く、口縁端部はつまみ出して終っている。外面は、口縁部から頸部にかけて鋭い4条の突帯が巡り、突帯間に櫛歯状工具による波状文を施す。肩部のタタキ目は、僅かに認められる。内面は、口縁部から頸部にかけて丁寧にナデられている。肩部には、やや凹凸が残り、おそらく指頭による成形痕と思われる。胎土は1・2mm程度の石英を含み、焼成はやや不良で内外面は暗灰色で、断面は濃肌色を呈している。

第 V 章 発掘調査の成果とまとめ

箭溪18号墳は、村内で発見されている円墳、方墳の中では比較的大きな墳丘規模を有している。第1・2号埋葬施設に使用している石棺材（石英安山岩）は、当丘陵から南西約100mの小溪谷の山肌に無数の柱状節理が発達露頭しており、地元では以前これを墓石に利用していたようである。また、当古墳群が築造された時代の福部平野は、眼下に広がるラグーンの名残りで、入り海若しくは湿地帯のような古環境であったと推定され、河川（水路）を交易に伴う舟の往来があったことが予想される。このことは、昭和初期まで細川田圃を耕作する海辺の村人は、船を利用して稲束の運搬をしていたことから窺うことができる。従って丘陵頂点に位置する前方後円墳を筆頭とする箭溪古墳群は、入り江に入った舟の直前方に雄大な姿を誇っていたと思われる。このように立地条件等を巧みに取り入れた墳形と構築方法に配慮が見られたが、残念なことに何時の頃かは不明の大規模な盗掘を受けており埋葬形態の追及にも限界があり、棺内に遺存していたであろう副葬品も遺存していなかった。従って検出された資料は乏しく、この僅かな資料から築造年代を推定することは困難であるが、あえて埋葬形態と墳丘周辺で検出された僅かな出土遺物によって以下のように推定した。

18号墳の墳形は前期から中期的様相を呈する方墳である。第1・2号埋葬施設の石棺の形態は、^(註)近隣の但馬地方で5世紀代の古墳群に多く見られる重厚で直線的な柱状節理面を有する石材（地元では「陰石」と呼ばれ、軟質で黄色を呈する流紋岩質凝灰岩）を継ぎ合わせる形態に類似している。第3号埋葬施設は割竹形木棺を直葬したものと推定され、土層観察から墳丘築造と同時に埋葬されたことは明らかである。墓壇の深さは第1・2号埋葬施設と比較して深い位置にあり、更に線刻礫の墓標的存在が検出された。このことから第1・2号埋葬施設の重厚な石材を使用した埋葬年代とは明らかに時期差が認められ、第3号埋葬施設が古く遡ると思われる。出土遺物で考察すると、北西周溝底面から検出された複合口縁に竹管文を刺突した甕形土器（P01）は形態、調整の特徴から見て弥生時代終末期と推定され、墳頂部中央の第1・2号埋葬施設付近で検出された土師質の高坏（P02）は、坏部の立上りと調整の特徴から実年代で言えば5世紀第3四半期から5世紀末あたり

に考えたい。

これにより、弥生時代終末期に第3号埋葬施設に伴う墳丘が築造され、古墳時代中期になって第1・2号埋葬施設が追葬されたと考えることもできるが、あまりにも時期差が感じられる。ここで問題となる弥生時代終末期の甕形土器（P01）は、口頸部の単片として検出され、他に同一固体と考えられる破片も検出されていないことから、墳丘築造以前の土器が2次的に混入した可能性が考えられる。従って墳丘築造時の第3号埋葬施設は、5世紀代中葉かやや古い段階に築造され、第1・2号埋葬施設の2基が5世紀第3四半期から5世紀後半を中心とする時期に相前後して築造されたものと推定される。

19号墳の墳形は、18号墳と同様に前期から中期的様相を呈する方墳であるが、18号墳の墳丘と比較して北東辺の周溝の穿ち方は、墳丘に直交しないで上方丘陵からの稜線に直交して穿たれた為墳形は歪な台形を呈している。北西周溝で18号墳周溝を切った痕跡が検出されたことから、18号墳築造後に19号墳が築造されたことは明らかで、ほぼ同時期と思われるが19号墳が18号墳より遡ることはない。墳丘上で検出された甕形土器により築造年代を推定すると、形態・調整の特徴から陶邑編年Ⅰ形式2段階あたりに併行するものと考えられる。これにより19号墳の築造は、実年代で言えば5世紀中葉頃の築造と推定される。

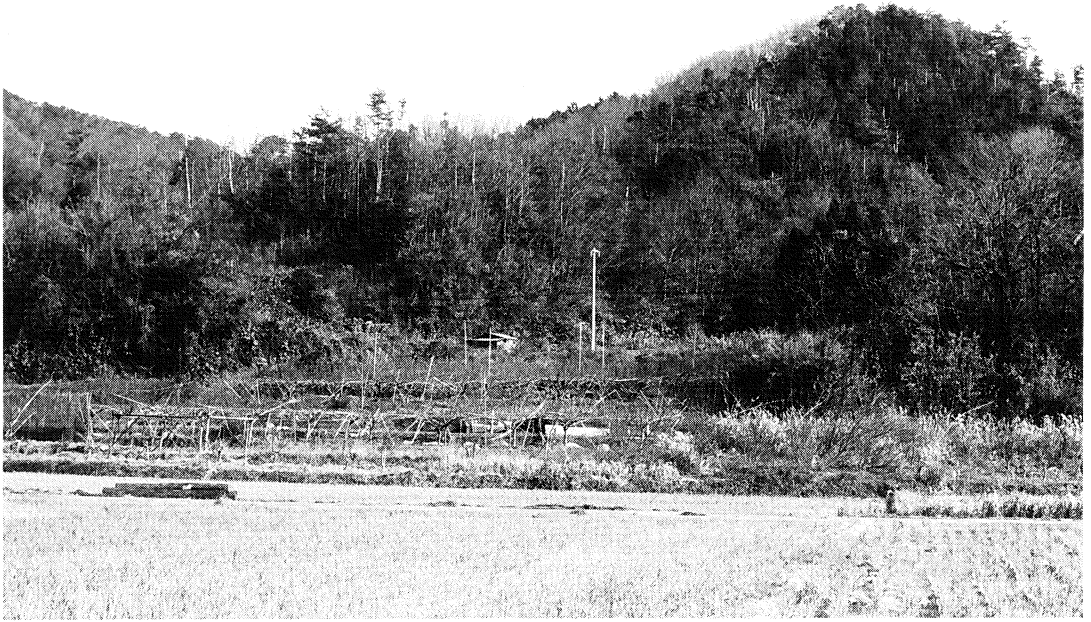
今回調査を行った箭溪18・19号墳は、福部村で初めて方墳を調査対象とした例となった。盗掘により良好な資料を得ることはできなかったが、5世紀中葉の頃を中心として築造され、築造方法・埋葬施設の形態などから但馬地方の影響が強く感じられたのが注目される。特に石棺材選定については、隣地から産出される材を活用したとはいうものの、現在までに村内の石棺材として把握されている大半は、今回検出された第1・2号埋葬施設のように重厚で扁平な材を多く用いている。これに対して鳥取平野の千代川流域などに見られる箱式石棺では、河原石、或いは薄板状の扁平石を材としたものが多く、形態がやや異なることから当地方と但馬地方との関連を印象付ける結果となった。幸いなことに工事に伴う調査によって消滅した古墳は2基に止まり、多くの古墳を保存することができたが、将来残された古墳群に調査のメスが入る時、周辺地域との関連性が更に追及されることを期待して結びとする。

註 豊岡市教育委員会『駄坂・舟隠遺跡群』1989

参考文献

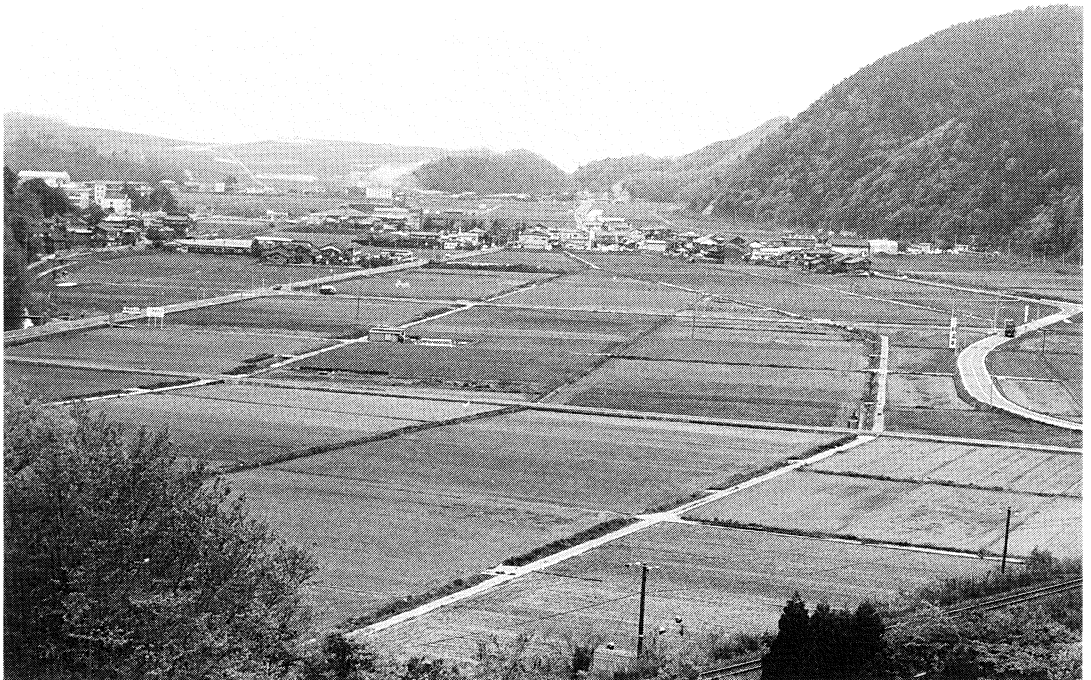
- (1) 豊岡市立郷土資料館『鎌田古墳群・下陰古墳群発掘調査報告』1976
- (2) 鳥取県教育文化財団『湖山第1遺跡』1989
- (3) 鳥取県教育文化財団『秋里遺跡』1990
- (4) 鳥取市教育委員会『岩吉遺跡Ⅲ』1991
- (5) 松山智弘『出雲における古墳時代前半期の土器の様相』『島根考古学会誌』島根考古学会1991

編 版 図



1

箭溪18・19号墳遠景(西から)



2

箭溪18・19号墳眼下に広がる福部平野



1

調査前の箭溪18・19号墳(北東から)



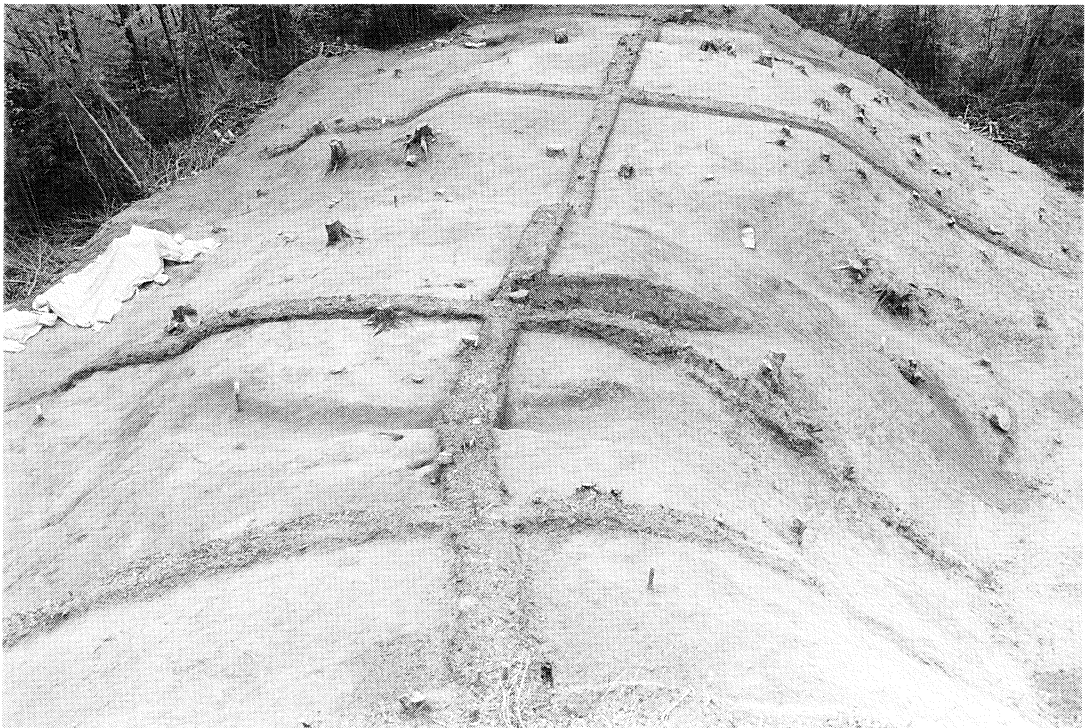
2

調査後の箭溪18・19号墳(北東から)



1

調査前の18・19号墳墳丘(南東から)



2

表土除去後の18・19号墳(南東から)



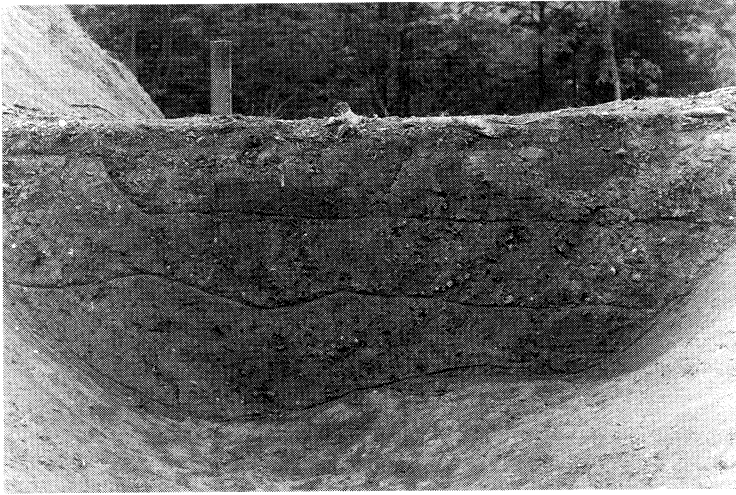
1

18・19号墳埋葬主体部検出状況(南東から)



2

調査後の18・19号墳墳丘(南東から)



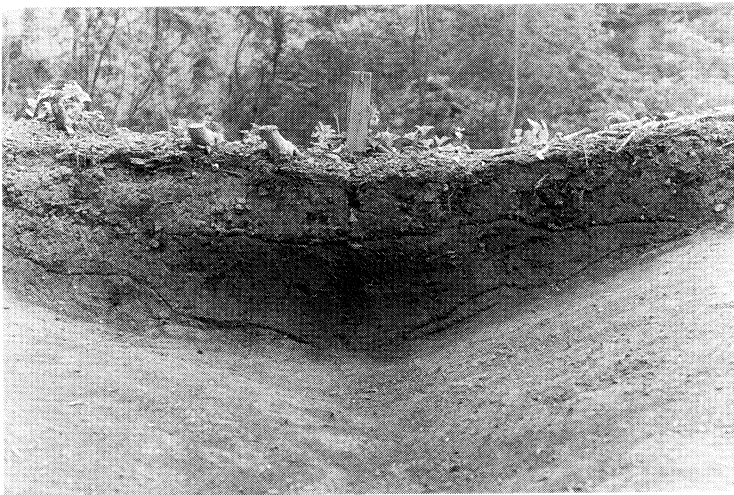
18号墳南東辺(19号墳北西辺)
周溝断面(北東から)

2

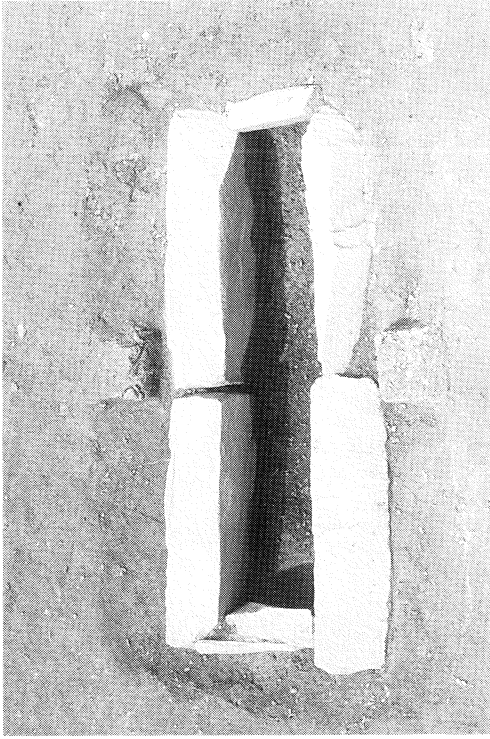


19号墳南東辺周溝断面
(南西から)

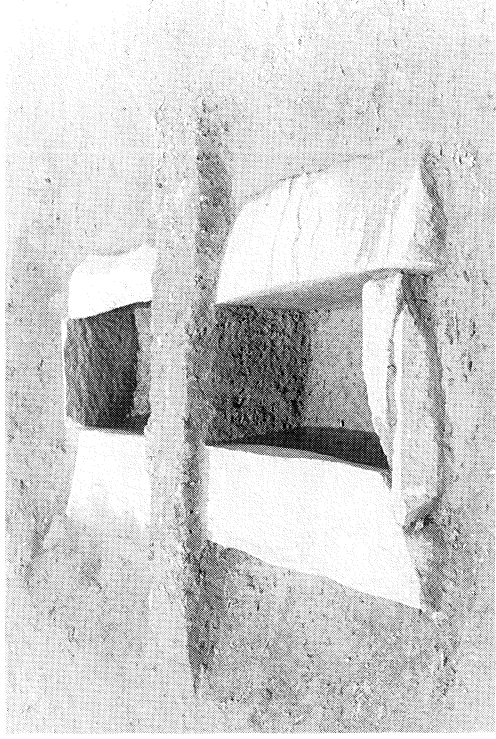
3



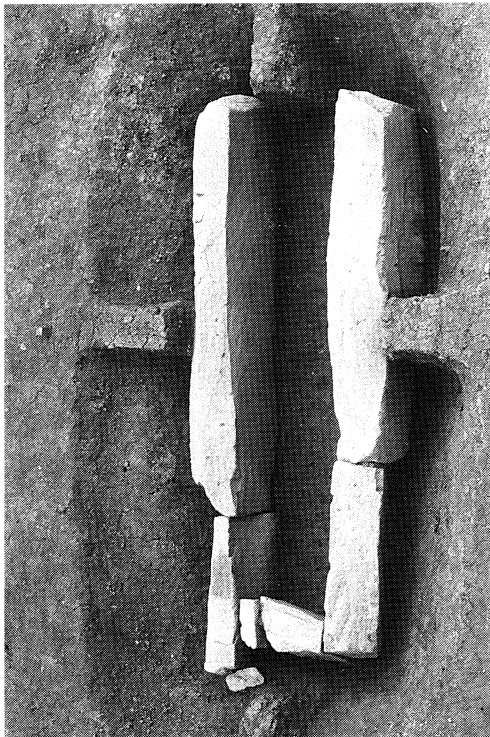
17号墳南東辺周溝断面
(南西から)



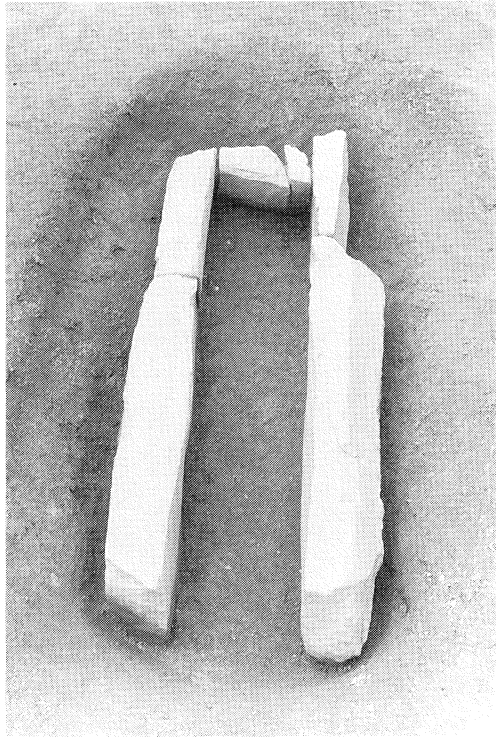
3 18号墳第2号埋葬施設(北東から)



4 18号墳第2号埋葬施設(南東から)



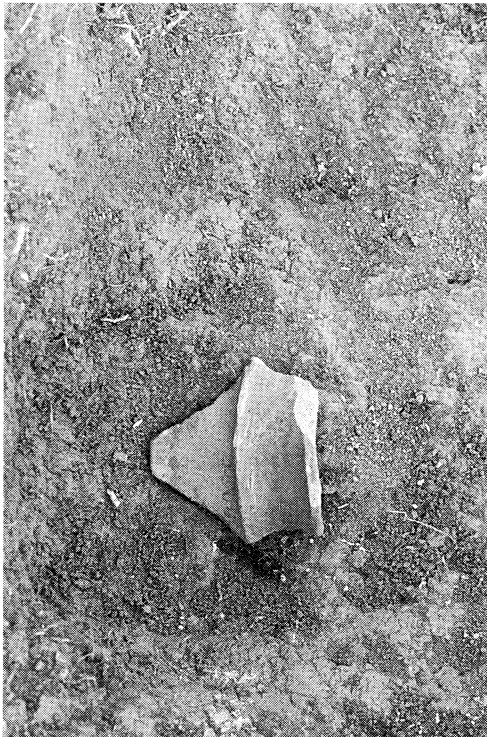
18号墳第1号埋葬施設(南西から)



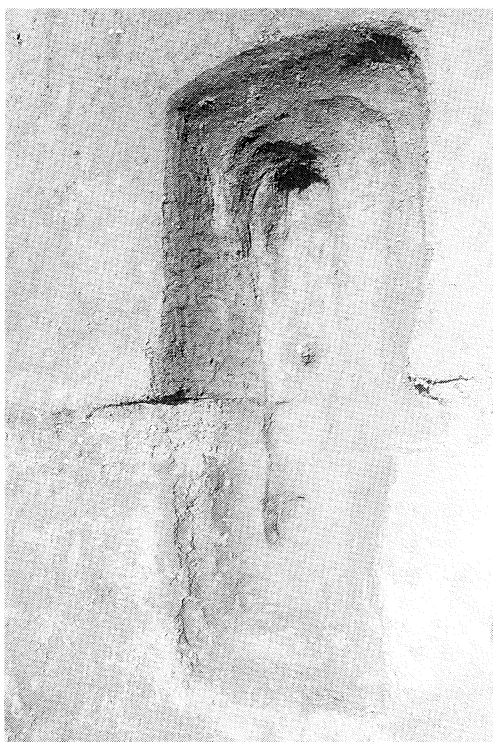
18号墳第1号埋葬施設(南東から)



3 18号墳 ピット遺構(P3)土層断面



4 18号墳周溝内弥生土器(Po1)検出状況



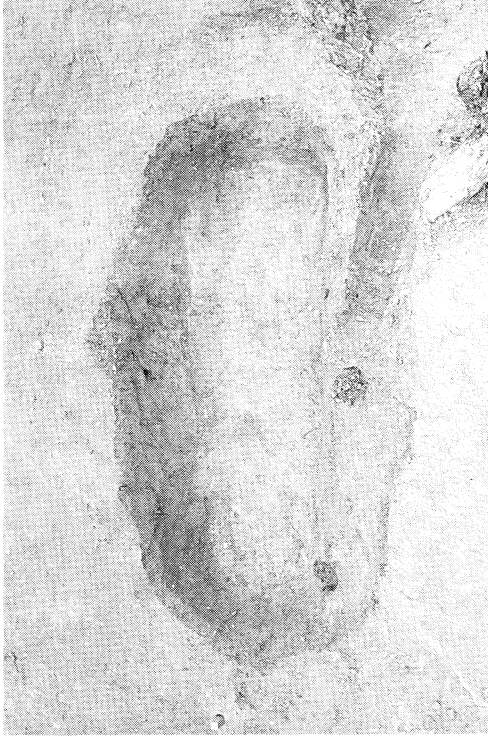
1 18号墳第3号埋葬施設完掘状況(南西から)



2 18号墳第3号埋葬施設完掘状況(北西から)



1 19号墳埋葬施設木棺痕跡土層断面(南から)



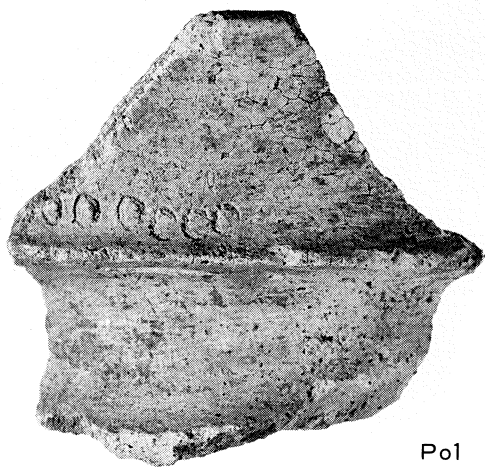
2 19号墳埋葬施設完掘状況(西から)



4 19号墳北東辺不明の凹壁断面(墳頂部から)



3 19号墳埋葬施設完掘状況(南から)



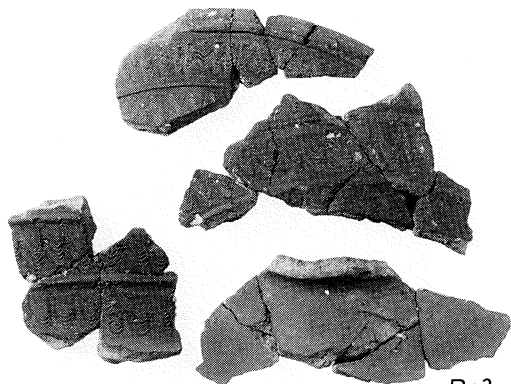
Po1

1



Po2

2

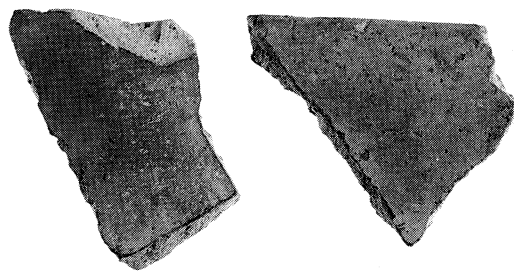


Po3

4

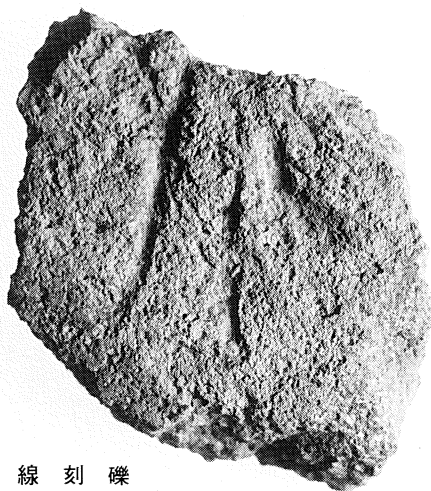


Po2



近世瓦

5



線刻礫

福部村埋蔵文化財調査報告書 第9集

箭溪18・19号墳発掘調査報告書

平成5年3月発行

編集 福部村教育委員会
発行 〒689-01 鳥取県岩美郡福部村細川668
TEL (0857) 75-2111

印刷 総合印刷出版株式会社
〒680 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23-0031
